

「団塊世代研究VI」
(平成16年度調査研究)



「ジャパニーズ家族の行方」 に関する調査研究

報告書

平成17年4月

研究体制

企画推進	立澤芳男	(有)マーケット・プレイス・オフィス	代表
	加藤信介	(財)ハイライフ研究所	
	萩原宏人	(財)ハイライフ研究所	
	高木麻紀子	(財)ハイライフ研究所	
研究協力	上野昭彦	(株)読売告告社	マーケティング本部

日本(ニッポン)の家族・新時代

—目次—

第Ⅰ部	還暦を迎えた日本の家族—日本の家族をめぐる環境の変化・構造の変化を探る—	2
Ⅰ-1	日本の家族の状況変化—人口動態と世帯動向およびその潮流からみた日本の家族	2
	1) 少子高齢社会に突入! 日本の家族は大きく変わる	3
	2) 出生人口数も死亡者数も「100万人台」時代! 疲労する日本の家族	6
	3) 世界一の長寿社会へ! 健康、医療介護、老後生活など家族全員に不安信号点滅	7
	4) 単独世帯、夫婦世帯が急増中! 失われるファミリーの絆、親中心から個人中心に	9
	5) 増える未婚と晩婚で、「変わり映えのしない家族」と「固まった家族」が長寿化	10
	6) 長男長女時代! 一人っ子も増え「家族は小さくなり、子が鎧(かすがい)!」に	13
	7) 「パラサイト、ニート、フリーター! 「新社会族」誕生で混乱する日本の家族	15
	8) 大量の人口が60歳代に突入! 団塊世代の行方で見本の家族の姿やかたちが決まる	16
Ⅰ-2	日本の家族の構造的変化と新しい動き—金属疲労を起こしている現代のニッポンの家族	17
	1) 「脱近代化」に向かう現代の家族。開かれた家族へ	17
	2) 消えていく規範的な家族～多様な家族スタイルに	18
	3) 還暦を迎える団塊世代とその家族—希薄になる夫婦関係と親子関係	19
	4) 社会全体のライフスタイルの変化が家族の構造改革を促す	20
第Ⅱ部	多様化する日本の家族—生活価値観の多様化に混乱する日本の家族—	21
Ⅱ-1	世代別に見る現代家族の現状及び比較—読売広告社「Canvass 調査」から	22
	—団塊ジュニア世帯家族vs団塊世代世帯家族vs高齢者世帯家族	22
	1. 家族生活における満足度について	23
	2. 生活分野別世代満足度Ⅰ.生活満足感	24
	3. 生活分野別に見た不満度	26
	4. 世代別世帯で見た生活関心分野	27
	5. 世代別に見たお金をかけても充実させたい分野	28
	6. 世代別に見た家庭生活の意識・態度	29
	7. 結婚/恋愛に関する意識(既婚者、未婚者)	32
Ⅱ-2	世帯形成拡大と解体の方向—進むニッポンの家族の解体と分化—	34
	1. 世帯の関係はどう変化したのか	34
	2. 世帯の拡大と分散化の状況	36
	3. 世帯の形成に関する意識の変化	38

Ⅱ—3	家族の変質とそのトレンド	41
	1. 家族の変質	41
	2. 家族機能の変容	41
Ⅱ—4	「家族の姿」 海外比較—諸外国と日本の家族類型比較	45
	1. 高齢者のいる世帯の家族形態・海外比較	45
	2. 社会の変化と家族の変貌・海外比較	49
	3. 家族の構造について・海外比較	51
	4. 家族ライフサイクル・海外比較	51
第Ⅲ部	日本の標準モデル家族の変質—団塊ニューファミリー家族の履歴書	53
Ⅲ—1	「テレビホームドラマ」に見るニッポンの家族	
	～戦後日本の家庭の悲喜劇を投射し続けたTVドラマ	54
	1950年代後半① ヒッチコック劇場から始まったテレビドラマ	54
	1950年代後半② 映画館や舞台の延長としてのドラマが普及	54
	1960年代前半 「スイート・ホーム」を理想スタイルとして描いた時代	55
	1960年代後半～1970年代前半 「大家族ホームドラマ」盛況	56
	1970年代後半～1980年代前半 家族真正面から立ち向かったホームドラマ	57
	1980年代 男女平等意識のライフスタイルドラマ	58
	1990年代 ホームドラマからトレンドドラマへ。家族が消えた	59
Ⅲ—2	日本のニューファミリー家族の履歴書	
	～団塊世代を中心とする戦後60年の家庭生活	60
	①団塊世代の青少年期～中高生、就職・大学生時代	
	新しい日本の家族を求め自由恋愛・恋愛気分に入る	60
	②団塊世代の若い夫婦時代～20歳代の生活事情	
	マイホームを夢見、マイカー、カラーテレビ、エアコンを楽しむ新・核家族	61
	③団塊世代の中高年期の生活事情	
	バブル経済に浮かれたニッポンの新家族	62
	④還暦を迎えるニューファミリー家族の主人公・団塊世代	
	バブル崩壊、資産の目減り、ローン返済、消費抑制、幻想の豊かな家族	65
	⑤還暦を迎えるニューファミリー家族の主人公・団塊世代	
	就業、年金、健康、老後生活の4大不安が待っている	67
第Ⅴ部	まとめ 浮遊する日本の家族「新・ジャパニーズ家族」	69
	■人間関係の不安・不信の危うさが見え隠れする現代日本の家族	69
	■目標がないため身近な存在に「安らぎや信頼」を求める現代ニッポンの家族	69
	■日本の新家族・ジャパニーズファミリー	71

調査研究企画意図

—ジャパニーズ家族のゆくえ—

「団塊の世代」の先達である昭和 22 年(1947)生まれが 2007 年に 60 歳になるが、現在、日本の企業の約 9 割が定年年齢を 60 歳に定めているため、仮に企業の定年制度が現状のままなら 2007 年から 2010 年にかけて大量の定年退職者が出ることになる。年間百万人単位での定年者出現は、日本の社会に様々な影響を与える事は間違いない。そのこと事態、日本の歴史上初めての出来事になるが、大量の団塊世代の定年退職者出現が引き出す問題以上の大きな問題を日本は抱えている。

それは、日本の人口減少問題である。人口減という社会は、現状の社会システム（例えば生産と消費の経済構造や生活保障と税負担の社会構造）の転換を余儀なくさせて、大量の定年退職者である団塊世代が、その社会システムの変換への対応の変換対象者としての現実的当事者になるわけである。

日本の社会は、2007 年に人口減少がはじまるが、その後間もなく団塊世代を中心に「超高齢社会」（2015 年に 4 人に 1 人が 65 歳以上）が訪れる。生涯 60 年人生を前提とした日本の社会の諸制度や仕組みは、一気に「生涯 80 年人生社会に」に変えて行く必要が迫られる。2007 年に 60 歳定年を迎えた多くの団塊世代は、生涯 80 年人生を全うすべく人生設計を歩まなければならない。その時、少子高齢社会化で徐々にその機能や形態は変質し、社会の礎としての「家族・家庭」は更なる大きな変化が起こるに違いない。

既に「妻と子供ふたり」といった団塊世代のモデルであった家族は分散・分化し、夫婦ふたり世帯が極端に増えている。また、「正社員である夫と専業主婦の妻と子供」といった中流社会モデル世帯は、団塊世代の定年で現実の足場が奪われそのモデル世帯が日本の社会から大量に消えてゆく。

中流社会のリーダ的存在であった大集団・団塊世代世帯（家族）が消失するなか、一方で、日本の社会は繁栄の陰にある「新たなる貧困」（＝下働きのパート主婦・派遣労働の増加による女性たちの貧困化、安価なパートタイム労働と使い捨てられる若者たちの転落等）が生まれ、所得格差も明らかになり「中流家庭の階層分断」が顕在化した。

団塊世代家族の社会からの消失は、日本の社会の世帯モデルであった「中流家族」の瓦解を促すことになるが、団塊世代が築いてきたその「家族・家庭」はいったいどうなるのか。

本調査研究では、団塊世代の家族が日本の社会でどんな役割を果たしたのか、どのようにして標準モデル化され崩れ始めたのか、また、日本の家族の象徴的存在であった団塊世代が描いてきた「理想の家族」とはなんだったのか。それらを調査研究する中から、日本の「新・ジャパニーズ家族」像を描いてみる。

第 I 部 還暦を迎えた日本の家族

—戦後 60 年、日本の家族の変化—

I-1 日本の家族を巡る状況の変化

—人口動態と世帯動向およびその潮流からみた日本の家族

- 1) 少子高齢社会に突入！ 日本の家族は大きく変わる。
- 2) 出生人口数も死亡者数も「100 万人台」時代！ 疲労する日本の家族
- 3) 世界一の長寿社会へ！ 健康、医療介護、老後生活など家族全員に不安信号点滅
- 4) 単独世帯、夫婦世帯が急増中！ 失われるファミリーの絆、親中心から個人中心に
- 5) 増える未婚と晩婚！ 「変わり映えのしない家族」と「固まった家族」が長寿化
- 6) 長男長女時代！ 一人っ子も増え「家族は小さくなり、子が鎧(かすがい)！」に
- 7) 「パラサイト、ニート、フリーター！ 「新社会族」誕生で混乱する日本の家族
- 8) 大量の人口が60歳代に突入！ 団塊世代の行方で日本の家族のかたちが決まる

I-2 日本の家族の構造的変化と新動向

—金属疲労を起こしている現代ニッポンの家族

- 1) 「脱近代化」に向かう現代の家族。～開かれた家族へ
- 2) 消えていく規範的な家族～多様な家族スタイルに～
- 3) 還暦を迎える団塊世代とその家族～希薄になる夫婦関係と親子関係～
- 4) 社会全体のライフスタイルの変化が家族の構造改革を促す

I-1 日本の家族を巡る状況の変化

～迫られる家族の変化～

—人口動態と世帯動向およびその潮流からみた日本の家族

1) 少子高齢社会に突入！ 日本の家族は大きく変わる。

家族の基本単位となる人口は、国立社会保障研究所の将来推定人口によると、2007年に日本の人口が減少し始めると推定している。その時点での年齢別人口では65歳以上の人口構成比が20%台に突入し、0～14歳人口を約900万人強上回る結果となっている。2000年現在で、すでに65歳以上人口の人口構成比は0～14歳人口を2.8%ポイント上回っているが2007年には6.4%ポイントに広がる。

日本の人口ピラミッドは、ピラミッド型からボーリングのピン型へ移行したが、2007年以降は逆ピラミッド型に形が変形する。

日本の家族も、今まで有効に機能してきた「核家族を軸とする子育てや老人介護・高齢者福祉」社会対応の家族構造や機能は、個人の責任を前提とする少子高齢社会への対応への転換を余儀なくされる。少子高齢社会は日本の家族を大きく変えることになる。

▼将来人口—平成14年推計・国立社会保障・人口問題研究所—

データ①2007年から人口が減少。老人割合は20%を超える。

—総人口、年齢3区分人口および年齢構造(中位推計)

年次		人口(1,000人)				割合(%)		
		総数	0～14歳	15～64歳	65歳以上	0～14歳	15～64歳	65歳以上
2000	平成12	126,926	18,505	86,380	22,041	14.6	68.1	17.4
2001	13	127,183	18,307	86,033	22,843	14.4	67.6	18.0
2002	14	127,377	18,123	85,673	23,581	14.2	67.3	18.5
2003	15	127,524	17,964	85,341	24,219	14.1	66.9	19.0
2004	16	127,635	17,842	85,071	24,722	14.0	66.7	19.4
2005	17	127,708	17,727	84,590	25,392	13.9	66.2	19.9
2006	18	127,741	17,623	83,946	26,172	13.8	65.7	20.5
2007	19	127,733	17,501	83,272	26,959	13.7	65.2	21.1
2010	22	127,473	17,074	81,665	28,735	13.4	64.1	22.5
2015	27	126,266	16,197	77,296	32,772	12.8	61.2	26.0

データ② 2006年から人口減少に突入。世帯数は増加(小規模世帯化)

[1]一般世帯総数及び平均世帯人員

指 標	2000年(平成12)	2025年(平成37)	指数(2000年=100)
一般世帯総数	4,678万世帯	4,964万世帯	106
	ピーク= 2015年 5,048万世帯 (108)		
(参考)総人口	12,693万人	12,114万人	99
	ピーク= 2006年 12,774万人 (101)		
平均世帯人員	2.67人	2.37人	--

データ③ 単独世帯、夫婦のみの世帯、ひとり親からと子からなる世帯急増。

[2]家族類型別一般世帯数及び割合

指 標	2000年(平成12)	2025年(平成37)	指数(2000年=100)
家族類型別世帯数			
単独世帯	1,291万世帯	1,716万世帯	133
夫婦のみの世帯	884万世帯	1,029万世帯	116
夫婦と子から成る世帯	1,492万世帯	1,200万世帯	80
ひとり親と子から成る世帯	358万世帯	479万世帯	134
その他の一般世帯	654万世帯	540万世帯	83
家族類型別割合(総数100%)			
単独世帯	27.6%	34.6%	
夫婦のみの世帯	18.9%	20.7%	
夫婦と子から成る世帯	31.9%	24.2%	
ひとり親と子から成る世帯	7.6%	9.7%	
その他の一般世帯	14.0%	10.9%	

関連参考データ

国勢調査と日本の人口

→人口が1億人をこえた1970年(昭和45)の国勢調査

→人口増加率が2%をきり始めた1995年(平成7)の国勢調査

→老人(65歳以上人口)が子供を上回った2000年の国勢調査

—日本の人口総数、増加率の推移(各年国勢調査)—

年		総数	増加率	人口比率		
		(人)	(%)	15歳未満	15~64歳	65歳以上
1920	<大正9>	55,963,053	…	36.5	58.3	5.3
25	<14>	59,736,822	6.7	36.7	58.2	5.1
30	<昭和5>	64,450,005	7.9	36.6	58.7	4.8
35	<10>	69,254,148	7.5	36.9	58.5	4.7
40	<15>	73,114,308	5.6	36.1	59.2	4.7
45	<20>	71,998,104	▲ 0.7	36.8	58.1	5.1
50	<25>	84,114,574	15.6	35.4	59.6	4.9
55	<30>	90,076,594	7.1	33.4	61.2	5.3
60	<35>	94,301,623	4.7	30.2	64.1	5.7
65	<40>	99,209,137	5.2	25.7	68.0	6.3
70	<45>	104,665,171	5.5	24.0	68.9	7.1
75	<50>	111,939,643	7	24.3	67.7	7.9
80	<55>	117,060,396	4.6	23.5	67.3	9.1
85	<60>	121,048,923	3.4	21.5	68.2	10.3
90	<平成2>	123,611,167	2.1	18.2	69.5	12.0
95	<7>	125,570,246	1.6	15.9	69.4	14.5
2000	<12>	126,925,843	1.1	14.6	67.9	17.3
1	<13>	127,290,749	0.3	14.4	67.7	18.0
2	<14>	127,435,350	0.1	14.2	67.3	18.5
3	<15>	127,619,474	0.1	14.0	66.9	19.0

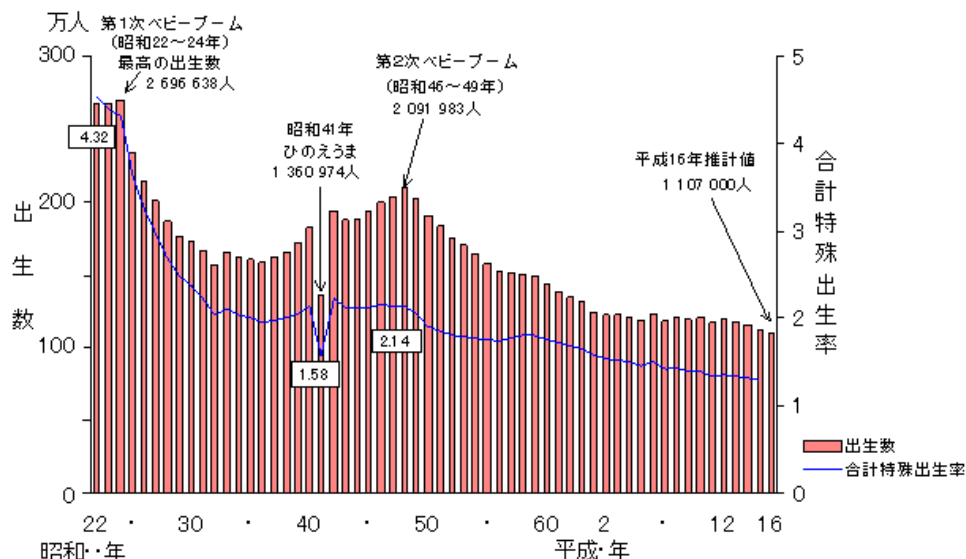
1. 総務省「国勢調査」、「人口推計」による
2. 1945年は沖縄県は調査されなかったため、人口総数に含まれていない
3. 1945、50年の増加率は、それぞれ40、50年の結果数値から沖縄県を除いて算出
4. 1940年の年齢3区分別人口は、朝鮮、台湾、樺太及び南洋群島以外の国籍の外国人(39,237人)を除く
5. 増加率は前回の調査人口に対する増加率。1920~2000年は「国勢調査」、2001~2003年は「人口推計」による

2) 出生人口数も死亡者数も「100 万人台」時代！疲労度が高まる日本の家族

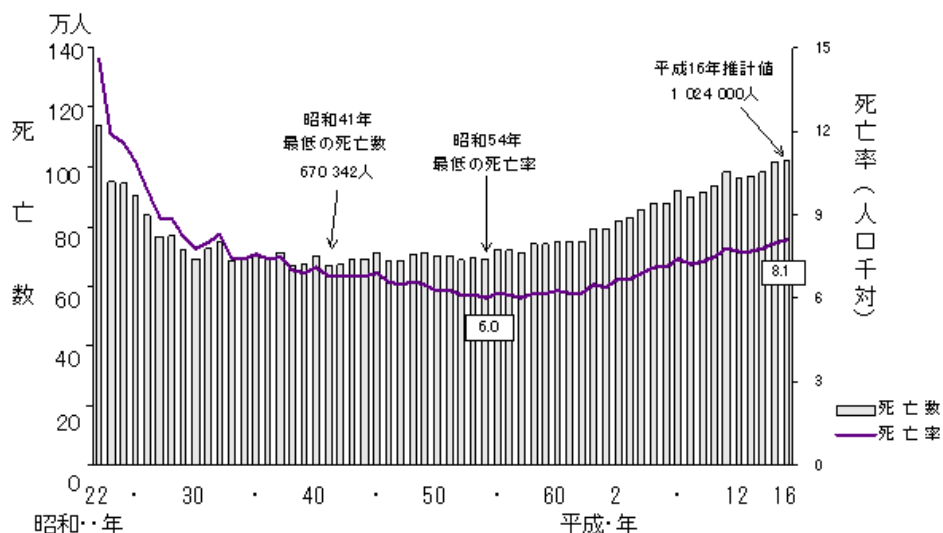
日本の人口が 2007 年から減少するといわれているが、将来人口を予想する場合、その根拠は合計特殊出生率に左右されるが、わかりにくい。日本の人口が減るということは、死亡数が出生数を上回ることであるが、日本の長期的なトレンドとして、年々の出生数と死亡数が等しくなりはじめており、身近なところでは、生まれる子供より死去する老人たちが目立つ。出生数の年次推移を見ると、昭和 24, 5 年の第一次ベビーブームの年間出生数 250 万人をピークとする出生数は、平成 16 年では 100 万人を若干上回る程度となり、一方死亡者数は、昭和 41 年に以降年々増え続け平成 16 年に 100 万人を超える。人口増減差し引きゼロというのは、平成 16 年で出生数と死亡者数がほぼ等しくなったことで確認される。

日本の家族において、明らかに出生する子供より、長命化する老人たちが目立ちはじめています。家族の構成に大きな変化が徐々に現れてくる。

▼出生数及び合計特殊出生率の年次推移



▼死亡数及び死亡率の年次推移



3) 世界一の長寿社会！ 健康管理、医療介護、老後生活など家族全員に不安信号点滅。

▼平均寿命は男（78歳）女（85歳）ともに世界一。生涯人生80年生活システムを

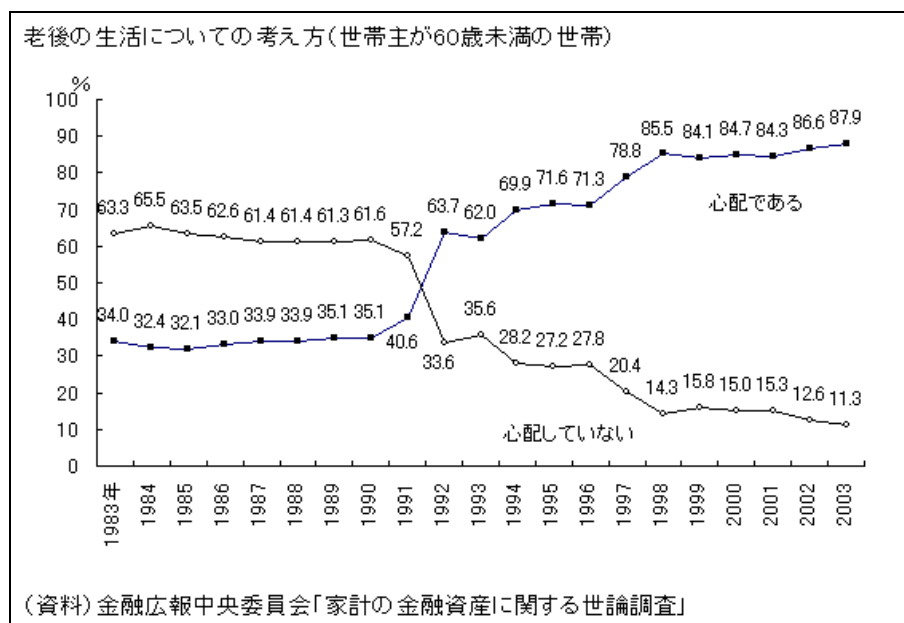
WHO（世界保健機構）は加盟192カ国の平均寿命を毎年発表しているが、高所得国ほど平均寿命が長く、低所得国ほど平均寿命が短いという一般傾向が認められる。日本は男女計の81.9歳であり、世界1平均寿命が高い。日本の場合、男女計ばかりでなく、男の平均寿命78.4歳、女の平均寿命85.3歳は、ともに世界一である。また、WHOは平均寿命の他に、健康でいられる寿命を健康寿命として発表しているが、これも日本が世界一である。（日本の平均寿命は厚生労働省の簡易生命表によれば2002年、2003年について、男は78.32歳、78.36歳、女は85.23歳、85.33歳と発表されている。）

▼9割の人が「老後の不安が心配だ！」。受け止められるか「家族」の役割

老後の生活について聞いたアンケート結果によると、1980年代には「心配していない」人が「心配である」人を上回っていたが、1992年以降は、逆転し、「心配である」人が多くなった。長期の不況が続いている他、近年では、年金財政の問題がクローズアップされ、「心配である」人の割合は、どんどん増加し、現在では9割近くにまで達している。内閣府の国民生活選好度調査（1998年）によれば、老後の不安の要因の第1位は「経済（生活費等）に関する不安」であり、第2位は「健康に関する不安」となっている。この2つに続いて「介護に関する不安」が第3位となっている。

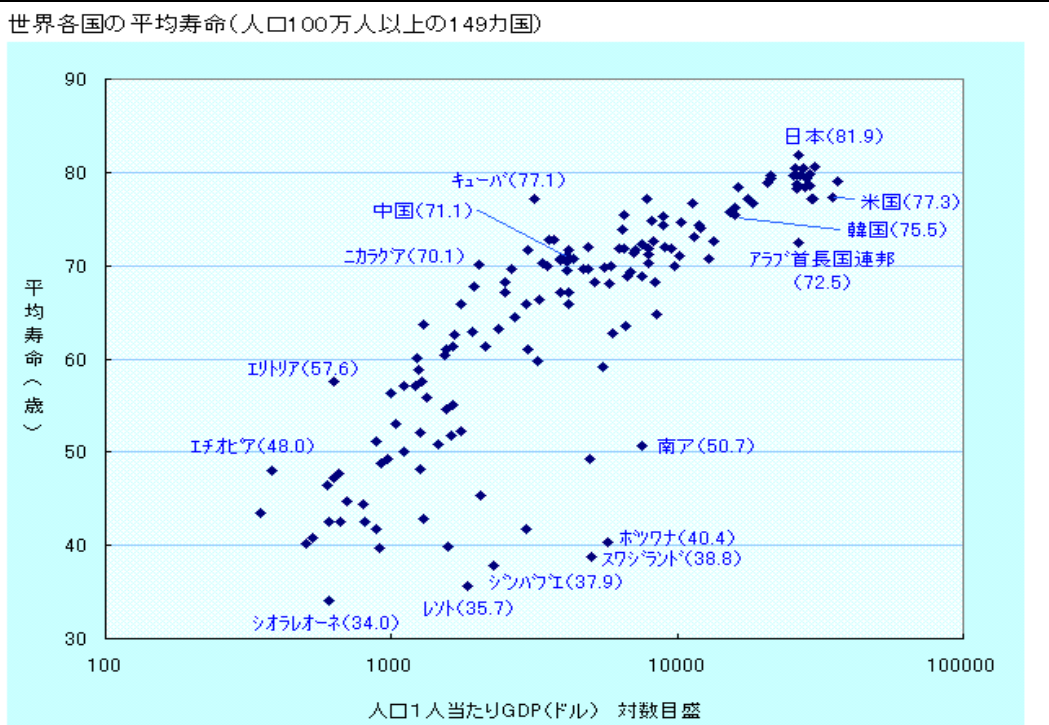
1986年の同様の質問をしたアンケート調査の結果と比べると「経済（生活費等）」と「介護」に関する不安が増加しているのが目立っている。

▼老後の生活について



関連参考データ

平均寿命の各国比較



(注) 平均寿命は男女計(2002年)、所得水準(人口1人当たりGDP)はPPPベースのドル(2001年)。
 (資料) WHO Core Health Indicators

(参考) 平均寿命とその世界ランキング

	平均寿命(02年)						健康寿命(02年)		人口1人当たりGDP(01年)	
	男女計		男		女		男女計		PPPドル	順位
	歳	順位	歳	順位	歳	順位	歳	順位		
日本	81.9	1	78.4	1	85.3	1	75.0	1	26,652	12
スイス	80.6	2	77.7	4	83.3	3	73.2	3	30,139	3
オーストラリア	80.4	3	77.9	3	83.0	4	72.6	5	27,614	10
スウェーデン	80.4	3	78.0	2	82.6	6	73.3	2	25,981	18
カナダ	79.8	5	77.2	7	82.3	8	72.0	7	29,235	6
フランス	79.7	6	75.9	14	83.5	2	72.0	7	26,809	11
イタリア	79.7	6	76.8	8	82.5	7	72.7	4	26,169	17
シンガポール	79.6	8	77.4	5	81.7	10	70.1	19	25,394	19
スペイン	79.6	8	76.1	12	83.0	4	72.6	5	21,351	20
オーストリア	79.4	10	76.4	10	82.2	9	71.4	11	28,233	8
イスラエル	79.4	10	77.3	6	81.4	15	71.4	11	21,223	21
ノルウェー	79.1	12	76.4	10	81.7	10	72.0	7	36,460	1
ニュージーランド	78.9	13	76.6	9	81.2	16	70.8	17	20,764	22
ドイツ	78.7	14	75.6	18	81.6	12	71.8	10	26,205	16
オランダ	78.6	15	76.0	13	81.1	17	71.2	13	29,231	7
ベルギー	78.4	16	75.2	19	81.5	13	71.1	14	27,932	9
ギリシャ	78.4	16	75.8	15	81.1	17	71.0	16	16,247	25
フィンランド	78.2	18	74.8	21	81.5	13	71.1	14	26,349	14
英国	78.2	18	75.8	15	80.5	19	70.6	18	26,273	15
米国	77.3	20	74.6	24	79.8	23	69.3	23	35,182	2
デンマーク	77.2	21	74.8	21	79.5	25	69.8	20	29,655	5
コスタリカ	77.1	22	74.8	21	79.5	25	67.2	29	7,838	49
キューバ	77.1	22	75.0	20	79.3	28	68.3	26	3,168	90
アイルランド	77.1	22	74.4	25	79.8	23	69.8	20	30,004	4
ポルトガル	77.1	22	73.6	26	80.5	19	69.2	24	17,573	24
韓国	75.5	30	71.8	31	79.4	27	67.8	27	15,905	26
中国	71.1	57	69.6	44	72.7	70	64.1	44	4,095	79

(注) 順位は人口100万人以上149カ国中。男女計の高い順に25カ国を掲載し韓国、中国を加えた。
 健康寿命は病気がかからずいられる寿命のこと。

(資料) WHO Core Health Indicators

4) 単独世帯、夫婦世帯が急増中！ 失われるファミリーの絆、親中心から個人中心に。

日本の家族世帯の家族類型別構成比の推移を見ると、昭和30年当時は、大正の時代の「親族世帯」を中心とする世帯が多い。しかし昭和40年代以降は「単独世帯」が急激に増えている。若い労働力としての独身男性女性が都市部に集まり単独世帯を形成している。しかし、一方昭和40年～45年頃にかけて、団塊の世代女性の結婚がブームとなり、「夫婦二人」あるいは「夫婦と子供世帯」から成る世帯も急増している。これが消費に食欲で活発に行動するニューファミリーとなって日の社会の中心的な役割を持つに至っている。

団塊世代が40歳代に入った平成2年頃から、日本の家族は、今まで4割以上を占めていた「夫婦と子供からなる世帯」が3割台に落ち込みはじめ、少子高齢化社会に突き進んだ日本社会の象徴的出来事として注目を浴びることになる。日本の家族の象徴としてのニューファミリー核家族が中心性を失うことになった。

平成2年以降、日本の家族世帯は少子高齢化の進捗スピードにあわせ「高齢単身生活者」「夫婦のみの世帯」「片親と子供のみの世帯」が着実に増えてきた。今までに日本の社会に見られなかった日本の新しい家族が続々誕生してきた。親と子という強い絆が失われ、新たなる家族の絆を探し始めた。

▼単独世帯は1千万世帯を超え25.6%に。夫婦のみの世帯は20%弱の800万世帯に！

—家族類型別(普通世帯)構成比の推移—

年	総数	親族世帯								非親族世帯	単独世帯
		総数	核家族世帯					その他親族			
			夫婦のみ	夫婦と子ども	男親と子ども	女親と子ども	その他				
1920	<大正9>	100	93.6	55.3	…	…	…	…	38.2	0.5	6
55	<昭和30>	100	96.1	59.6	6.8	43.1	1.6	8.1	36.5	0.5	3.4
60	<35>	100	94.9	60.2	8.3	43.4	1.3	7.3	34.7	0.4	4.7
65	<40>	100	91.8	62.6	9.8	45.4	1	6.4	29.2	0.4	7.8
70	<45>	100	88.9	63.5	11	46.1	0.9	5.5	25.4	0.4	10.8
75	<50>	100	86.2	63.9	12.4	45.7	0.8	5	22.3	0.2	13.5
80	<55>	100	84	63.3	13.1	44.2	0.9	5.1	20.7	0.2	15.8
85	<60>	100	82.3	62.5	14.3	41.6	1	5.6	19.8	0.2	17.5
90	<平成2>	100	79.6	61.8	16.1	38.7	1.1	5.9	17.8	0.2	20.2
95	<7>	100	76.6	60.6	17.9	35.4	1.1	6.2	15.9	0.3	23.1
2000	<12>	100	74	60.1	19.4	32.8	1.2	6.7	13.9	0.4	25.6

資料;各年「国勢調査」

5) 増える未婚と晩婚！「変わり映えのしない家族」と「固まった家族」が長寿化。

▼未婚率の上昇に貢献する優柔不断で優しい団塊世代の家族達

20歳代後半から30歳代の未婚率(結婚していない人の割合)を見ると、1970年代頃まで安定した率で推移していたのが、70年代半ば頃から上昇傾向が顕著となってきた。総務省「国勢調査」によると、2000(平成12)年の全国における20～39歳の未婚者数は、約1,833万人であり、男性が約1,040万人、女性が約793万人である。

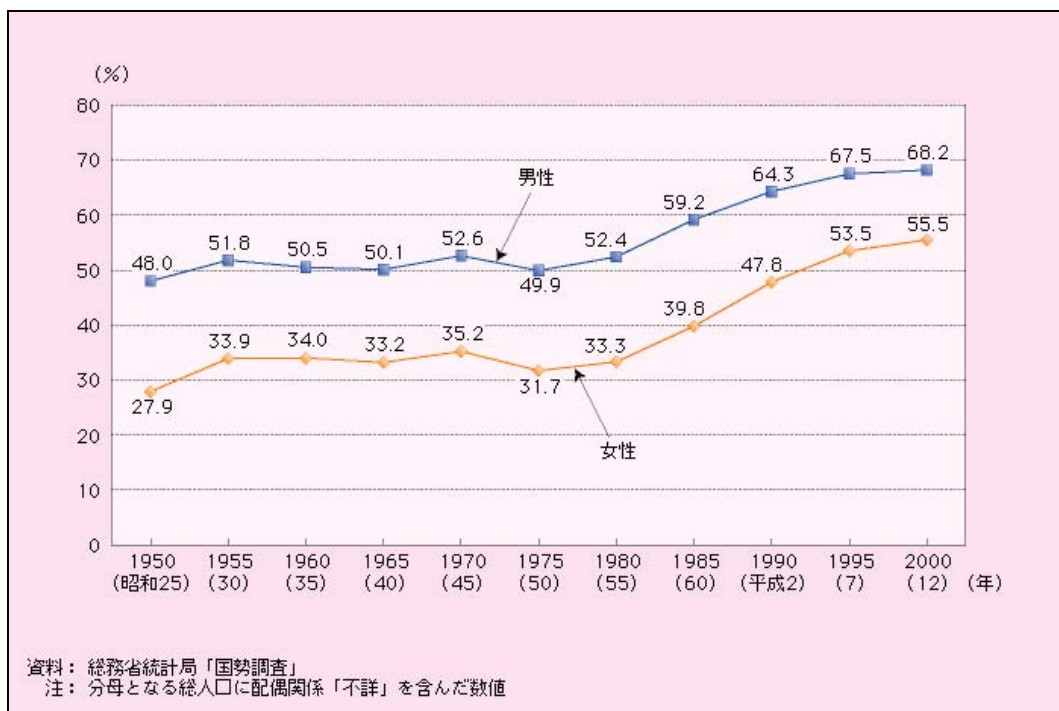
—2000年の未婚者数(年齢階級別)単位;千人

歳	未婚者数(男性)	未婚者数(女性)
20～24	4,001	3,618
25～29	3,443	2,604
30～34	1,903	1,152
35～39	1,052	555

資料:総務省統計局「国勢調査」2000(平成12)年

また、20～34歳の未婚率は、1950(昭和25)年から80(昭和55)年頃までは、男性が約50%、女性は約33%と、さほど変化がなく推移してきた。しかし、1980年代後半から未婚率が上昇傾向となり、2000(平成12)年には、男性68.2%、女性55.5%となっており、結婚していない人の方が多くなっている。

—未婚率の推移(20～34歳)—

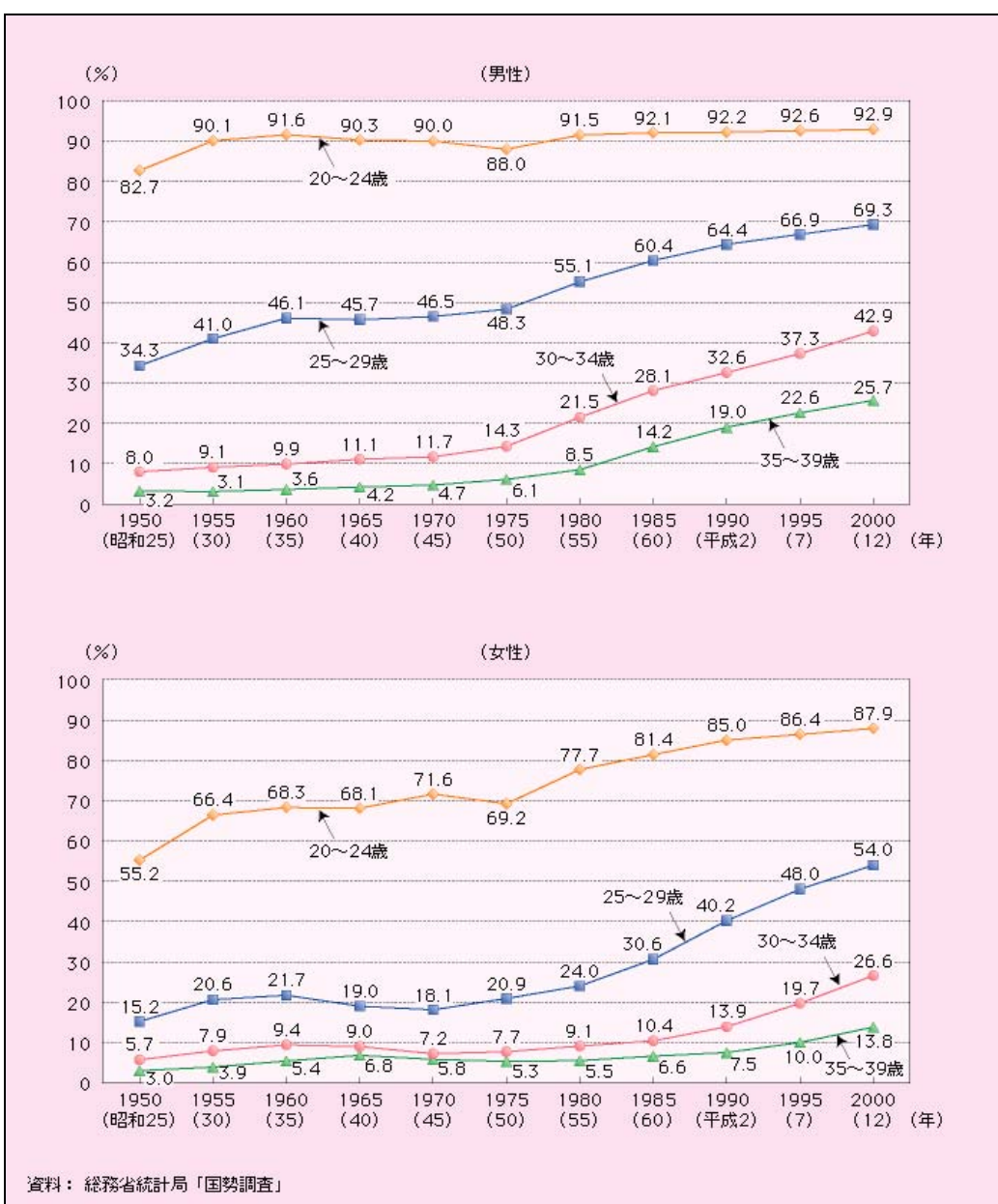


▼増える生涯未婚者。問われる「家族の存在」。

5歳年齢階級別の未婚率をみると、1980（昭和55）年と2000（平成12）年と比較して、男性の場合、25～29歳では55.1%から69.3%へ、30～34歳では21.5%から42.9%へと倍増し、女性の場合、25～29歳では24.0%から54.0%へと倍増し、30～34歳では9.1%から26.6%へと3倍になっている。

女性の25～29歳では、1970年代では「5人に1人が独身」であったが、30年間に「2人に1人が独身」という状態に変化している。男性の25～29歳では、70年代では「2人に1人が独身」であったが、現在は「10人に7人は独身」となっている。

—年齢別未婚率の推移

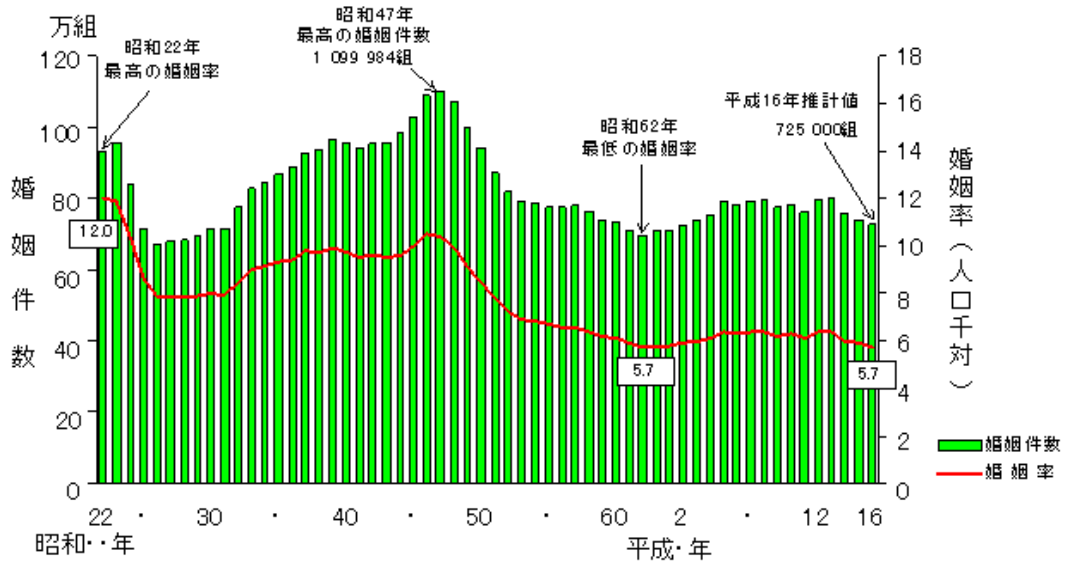


関連参考データ

ピークを超えたか？ 婚姻・離婚事情

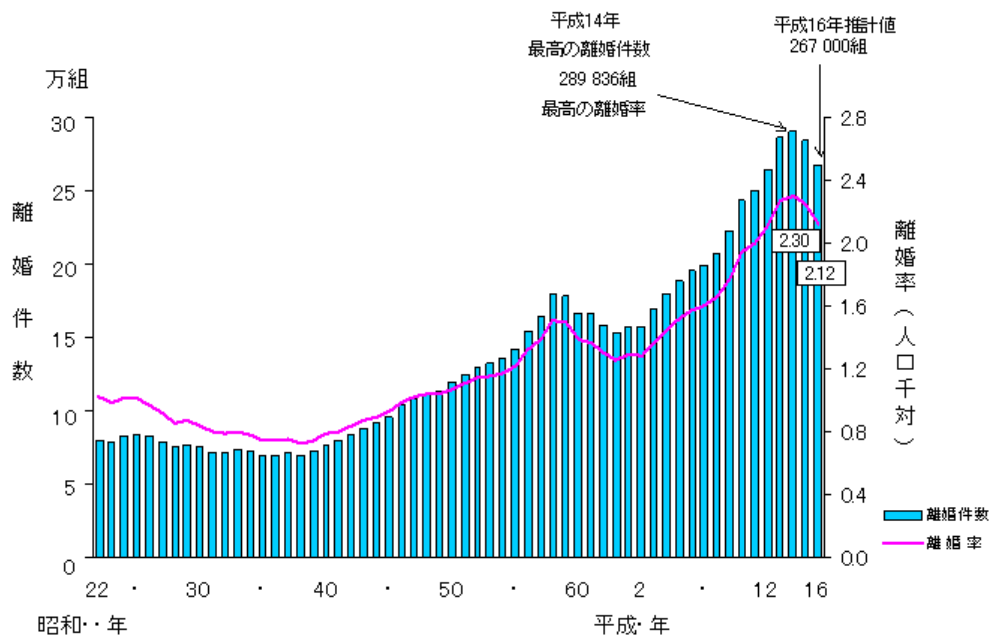
▼婚姻件数はピーク時の7割。かぎ握る第二次ベビーブーム

—婚姻件数及び婚姻率の年次推移—



▼歩留まりするか離婚率

—離婚件数及び離婚率の年次推移—

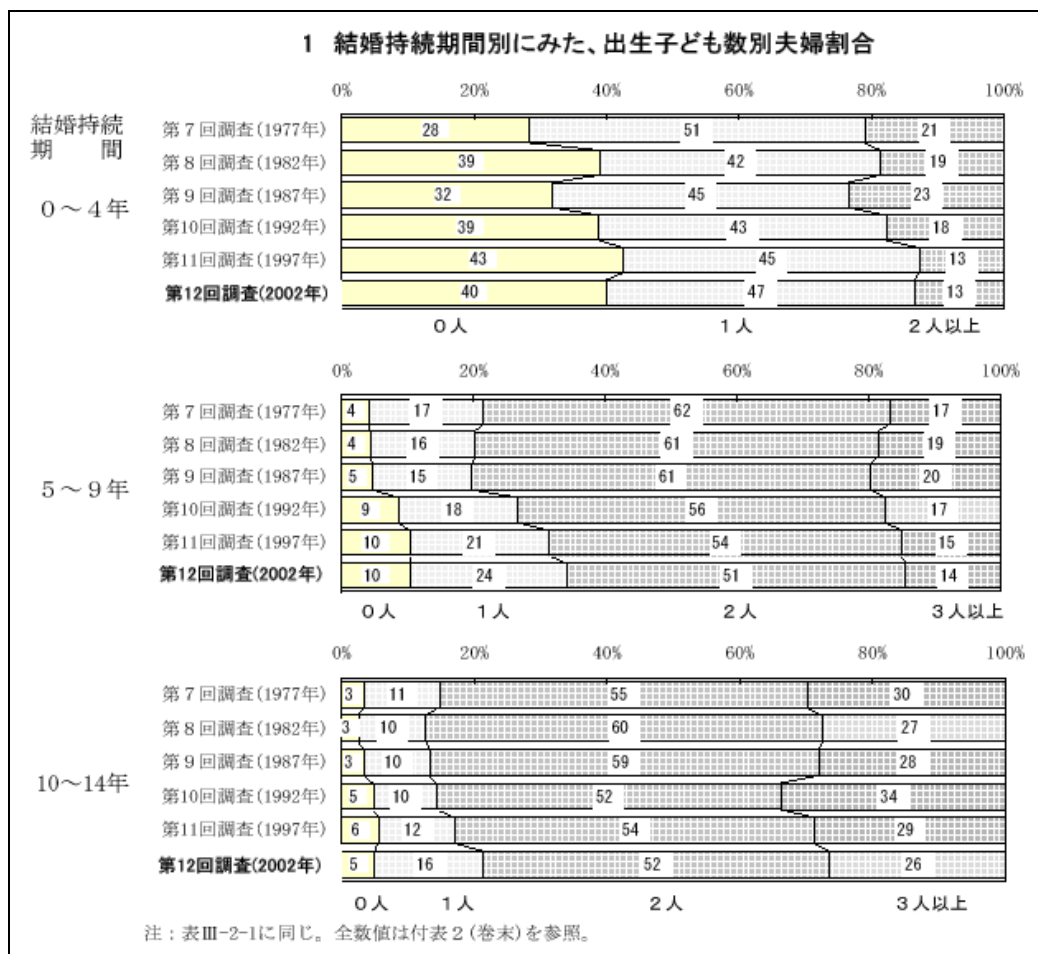


6) 長男長女時代！一人っ子も増え「家族は小さくなりけり」「子が鎧(かすがい)」に

最近の調査で、結婚後 5～9 年、10～14 年の夫婦で結婚持続期間ごとに子ども数の分布をみると、結婚後 5～9 年では第 10 回調査(1992 年)以降、10～14 年では第 11 回調査(1997 年)から、子ども数 2 人以上の夫婦が減り、1 人っ子が増えている。結婚持続期間 5～9 年では同時期に子どものいない夫婦もやや増えた。

戦後の日本の家族の特徴は、なんと言っても「子供を家族の中心とする」といった価値観を夫婦ともに持っていることだ。育児、子育てまで子供のためならずべてを犠牲にする風潮がある。しかし、一人っ子が増え、又、長男長女時代に入り、孫を奪い合う二組の老夫婦、一人っ子であるがゆえに結婚できない若者などなど、親と子とその孫をめぐるさまざまな問題が派生してきた。少子化問題は社会問題というより個人の家庭問題化している。「夫婦と子供からなる」核家族は少なくなる一方で、家族の単位も小さくなってきており、大家族ばかりか核家族の存在も怪しくなっている。日本の家族はいったいどのような家族がイメージできるのか、それが問題である。

▼結婚持続期間別にみた、出生子供数別夫婦割合



資料；「出生に関する統計」・人口動態統計特殊報告

関連参考データ

明治・大正・昭和の出生コーホートとその子供の数

—子どもの数は2人または3人が8割以上を占める—

夫婦が最終的に生んだ子どもの数(結婚持続期間 15～19 の夫婦の出生子ども数)は、第7回調査(1977年)以降ほとんど変化がない。2人ないし3人に集中した構成となっている。すなわち、約8割の夫婦が2人か3人の子どもを持っている。また、子どものいない夫婦は約3%、1人っ子が1割弱、4人以上は4～5%となっている。

▼出生コーホート別妻の出生児数割合及び平均出生児数(資料;人口動態統計特殊報告)

出生コーホート	調査年次	調査時年齢	出生児数割合(%)					平均出生児数(人)
			無子	1人	2人	3人	4人以上	
明治23年以前	(昭和25)	60歳以上	11.8	6.8	6.6	8.0	66.8	4.96
24～28	(25)	55～59	10.1	7.3	6.8	7.6	68.1	5.07
29～33	(25)	50～54	9.4	7.6	6.9	8.3	67.9	5.03
34～38	(25)	45～49	8.6	7.5	7.4	9.0	67.4	4.99
44～大正4	(35)	45～49	7.1	7.9	9.4	13.8	61.8	4.18
10～14	(45)	45～49	6.9	9.2	24.5	29.7	29.6	2.77
昭和3～7	(52)	45～49	3.6	11.0	47.0	29.0	9.4	2.33
8～12	(57)	45～49	3.6	10.8	54.2	25.7	5.7	2.21
13～17	(62)	45～49	3.6	10.3	55.0	25.5	5.5	2.22
18～22	(平成4)	45～49	3.8	8.9	57.0	23.9	5.0	2.18
23～27 (団塊世代)	(9)	45～49	3.2	12.1	55.5	24.0	3.5	2.13
28～32	(14)	45～50	4.1	9.1	52.9	28.4	4.0	2.20

資料:1970(昭和45)年以前は総務省統計局「国勢調査」、1977(昭和52)年以降は国立社会保障・人口問題研究所「出産力調査」及び「出生動向基本調査」による。

7)「パラサイト族、ニート族にフリーター！ 「新社会族」誕生で混乱する家族

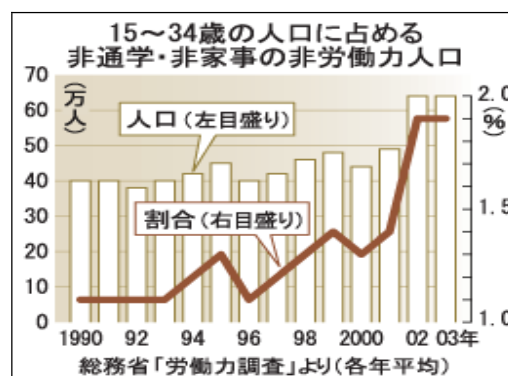
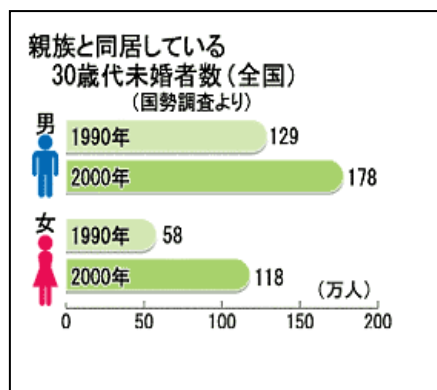
▼親がバックアップするパラサイト貴族たちの誕生

2000年の国勢調査によると、親族と同居する20代、30代の未婚者は約1260万人。10年前に比べると約2割増え、特に30代女性の増加が目立つ。成人しても親が面倒を見る社会になってきた。親が子供を保護し、親が支援できるならよいが、親がずっと元気でいられるわけではない。10年、20年後、パラサイトし続けた若者が年を取っても、自立できず定職にもつけないという状況が心配される。親に頼らなくても自立して楽しく暮らせる社会を作り、奨学金の充実や、親元を離れて自活する若者向けの住宅対策、就労や子育て支援など求められる。問題は、パラサイトシングルという存在が今の若者の厳しい経済状況を見えにくくし、若者の中で格差や階級化を生んでいることである。

▼フリーター約417万人。ニート（若年層無業者）52万人。親も問われる社会

内閣府の平成15年国民生活白書（2003年5月末発表）がフリーター数417万人という数字を公表。フリーターの増加が社会問題化している。年齢別に見ると、1992年には20代前半で最も多かったフリーターが、2001年には20代後半にピークがシフトし、30代でもフリーターが急増するなど、フリーター生活の長期化が懸念される。若年の職業能力が高まらないため、日本産業の競争力や経済全体の成長の制約となるおそれがある。犯罪の増加など社会不安に結びつく可能性がある。未婚化、晩婚化、少子化などを一層促進し、年金など社会保障制度にも影響が生じると考えられるが、フリーターを吐き出す家庭の存在に危うさがある。

最近になってフリーターよりさらに深刻な存在としてニートが注目されている。ニートとは、Not in Education、Employment or Trainingの略語「学校にも行かず、働いてもないし、職業訓練にも参加していない若者を意味するが、ニート（若年層無業者）人口は現在52万人。対処の方法で家族の混乱が始まっている。



8)大量の人口が60歳代に突入！ 団塊世代の行方で日本の家族のかたちが決まる。

▼年間 250 万人が 60 歳に。大量の定年退職者が日本を襲う

日本の戦後の家族モデルとなった団塊世代家族であるが、その主人公である団塊世代の世帯主が 2007 年に約 100 万人前後の単位で定年を迎える。家族モデルのベースを作ってきたサラリーという一定した定期収入が閉ざされたとき、家族モデルは大きく崩れることは間違いない。団塊世代の大量退職者の出現は日本戦後家族モデルの崩壊でもある。団塊世代の定年後の動向は日本家族の将来像に大きな影響力を与える。

一定年退職者数の推移(性別 単位千人)―厚生労働省「雇用動向調査」

年	計	男	女	全離職者に占める割合(%)
1980 年	129.9	101.0	28.9	3.6
1985	183.7	139.3	44.4	4.7
1990	186.6	145.3	41.3	3.7
1995	301.6	221.7	79.9	5.5
2000	346.2	256.2	90.0	5.2
2001	381.8	282.4	99.4	5.4
2002	386.5	274.6	111.9	5.7

▼増える中高年の再婚組。夢再びか、新しい夢を育むのか。最後の戦いに

離婚件数が増加している中で、再婚件数も増加。70 年と比較すると、99 年では男女ともにすべての年齢で再婚件数が増えており、95 年では、離婚した男性の 76%、女性の 64%が再婚している。また、離婚してから再婚するまでの期間をみると、3 年未満に再婚している人の割合は低下傾向にあり、5 年以上経過している人の割合が高まっている。

団塊世代が定年退職を迎える前後、男女ともに生活をやりなおす選択として離婚し、再婚というケースも多く見られるようになった。団塊世代は、疲労した日本の家族団塊世代家族モデルの破綻への繕いと、新たな家族モデル開発とのせめぎ合いの渦中にある。―離婚後の再婚率・再婚組数推移は年間 18 万組に―

	1970 年	1975 年	1980 年	1985 年	1990 年	1995 年	2000 年	2001 年
離婚組数	95,937	119,135	141,689	166,640	157,608	199,016	264,246	285,911
婚姻組数	1,029,405	941,628	774,702	735,850	722,138	791,888	798,138	799,999
再婚組数	114,535	119,246	117,329	122,463	132,252	145,352	167,903	176,485
離婚率	0.93%	1.07%	1.22%	1.39%	1.28%	1.60%	2.10%	2.27%

資料;国立社会保障・人口問題研究所の算定から引用(平成 14 年度人口動態統計)

金属疲労を起こしている現代ニッポンの家族

1) 「脱近代化」へ向かう現代の家族～開かれた家族へ～

① 家族崩壊は近代から現代への「家族観」の発想転換現象か

夫は収入を得てお金を家に入れるとか、家事は女性の当然の仕事とか、老人の世話は家族ですべきだと思うことは自由だが、そのことは、結果的にそれぞれの立場にある人に一方的な責任を押しつけることになる。しかし、このような考え方が普遍的だとされてしまうことが多々見られ、これらに反すると離婚問題や家庭問題など家族の崩壊として総括されてしまう。しかし現在の社会で普遍的だとされている家族の考え方（規範的とされる）は、歴史研究上では、『近代家族』と呼ばれている。

今日の日本社会では、パラサイト家族、母子家庭、離婚・再婚家族等の増加など今までとは違う家族が登場し、家族の崩壊への危機感があふれている。しかし、それらの行動はむしろ、「脱（近代家族）化」、つまり「近代家族がスタンダードとなった時代の終焉」と考える人々が若い人中心に出てきている。新しい家族への過渡的段階として現代家族をとらえるという動きである。参考までに、「近代家族」(modern family)とは何か。落合恵美子氏によると、「近代家族」は、つぎのような特徴をもつという。これを見ると脱近代家族現象が日本に起こっていることがよくわかる。家族像を普遍的なもの・規範的なものとの錯覚すると、離婚の増加や共働きなどの現象が「家族崩壊」にみえてしまう。

- 1) 家内領域と公共領域の分離——そもそも家族がプライベートな領域として成立したのは近代になってから。近代市場の成立とともに、市場に参加者である個人を供給する装置として分離して位置づけられるようになった。
- 2) 家族成員相互の強い情緒的關係——家族成員は強い情緒的なきずなで結ばれている。家族愛が特権的に優先されるのは近代家族特有の現象。その始発点に位置する恋愛結婚もまた近代の産物である。これを「近代ロマンチックラブ・イデオロギー」という。
- 3) 子供中心主義——家族のもっとも基本的な機能は子どもの社会化にあるとする考え方。
- 4) 男は公共領域・女は家内領域という性別分業——家族成員は性別により異なる役割をもつ。とりわけ家事労働は家族愛のあらわれとしてとらえられる。
- 5) 家族の集団性の強化——家族は開かれたネットワークであることをやめて集団としてのまとまりを強める。
- 6) 社交の衰退——家族は公共領域からひきこもる。
- 7) 非親族の排除——家族は親族から構成されるとする。非血縁者の排除は近代家族特有の現象。
- 8) 核家族——家族の基本型は核家族である。

2)消えていく規範的な家族～多様な家族スタイルに～

現在の家族を見ると、父親や親戚などの目を気にして自由度が制限された昔と違って、現在は今日ひとりひとりの個人が、それぞれのライフスタイル・生き方をいろいろ選択できるようになりつつある。そうになると、家族の形だけでなく、結婚の形や、男女の関係、個人の生き方も多様化していくことになるだろうし、すでにそうなりつつある。その個人のライフスタイルを最も生かす形で家族構成が出来上がってきている。

たとえば、つぎのような家族の形もそうめずらしくない。

- イ. 一時的に別居する家族 [単身赴任家族]、
- ロ. 通い婚・週末結婚・長距離結婚 [職の少ない大学研究者などに多い]
- ハ. ニュー・シングル [一人家族とか非婚と呼ばれる。シングルといっても、異性の友人がいたり、親と同居したりしている]
- ニ. 子どもをもたない共働き夫婦 [DINKS=double income no kids]
- ホ. 離婚による母子家庭・父子家庭 [片親家族・単親家庭]
- ヘ. 娘の家族と同居する三世代家族 [マスオさん現象]
- ト. 婚姻届を出さないで夫婦別姓を貫く家族 [事実婚・別姓結婚]
- チ. ステップ・ファミリー [継(まま)家族と訳される。離婚者どうしの子連れ再婚] の登場

このようなさまざまな家族の形が社会のあちらこちらでみられるようになった。つまり、家族を〈近代家族〉の型にはめてとらえることがもはやできなくなってきたことを示すものである。

これらの多様な家族スタイルが出て来たなかで、そのベースになるある共通の価値観がある。それは、家族と言うものは、役割分業によって部品化してしまう夫や妻ではなく、弾力的に互いの役割をカバーする適応力をもつと言う事である。この多様な家族スタイルは、今後は今まで規範とさえされてきたところの、血縁で結ばれ同居している家族の間でだけ扶養や援助や感情的サポートを分かちあうと言う内的な家族からの脱出を促し、一方で外部の個人や機関に支えられ、また支えあうネットワークづくりを推し進める事になる。

家庭を社会から隔離するのではなく開かれた場とし、男性も女性も、人間としてトータルな能力をもつことなどが、これからの家族の活性化について不可欠である。

3) 還暦を迎える団塊世代とその家族—希薄になる夫婦関係と親子関係～

還暦といえば、かつてのイメージからすれば、隠居とまでは言わないが、孫の成長を愉しむという生活が想像される。やはり団塊世代であっても、テレビドラマ「7人の孫」ではないが、たくさんの孫に囲まれている姿が想像される。団塊世代とて結局は昔の人と変わらないのではと言うが内実はかなり異なる。

何が違うのかと言えば、昭和40年代に還暦を迎えた人達、つまり団塊世代の親たちは、自分が現役世代であった昭和30年代（都市化と住宅難に伴う核家族化、女性中心スタイル）への反作用の色彩が濃い。そのことは、例えば、昭和39年～41年にテレビ放映された『七人の孫』（祖父を中心にその子、その孫7人が登場。明治・大正・昭和と3代の語らいを軸とした物語）に象徴されるが、ドラマを現実の反世界として見れば、願望あるいは現実逃避の家族像が浮かび上がってくる。寂しさとプライドが混在する還暦像である。団塊世代の親達は、核家族の先達であった世代としての核家族問題（親の権威の失墜や若者との価値観相違の健在化などによる家族不和）あるいは、女性権利の確立や女性上位的な側面を見せはじめた社会になっての老後生活を上手に乗り切った。

しかし、60歳台にはいる団塊世代の置かれた社会状況は、家族中心主義という精神的な意味、あるいは家族の長としての立場は前の世代とは変わらない。変わっているのは、ひとつは、社会全体が雇用あるいは年金や医療などの社会保障についての不安を助長するような経済体制・政治体制に日本の社会になっていることである。もうひとつは、家族が多様化・個性化したことである。前の世代は、親の権威（所得や思想・価値観）の下、ひとつにまとまって家族が運営され、その運営のやり方を代えることで親子関係をさらに維持するということができたが、現在の団塊世代には、60歳を迎える前に親子関係や夫婦関係はばらばらになっている。夫婦関係でいえば定年前から離婚の危機にある団塊世代夫婦も多い。また、子供との同居かなわらず夫婦二人暮らしが進行している。

子供達を見れば、成人になっても親と住みたがり、パラサイト化が進み結婚しない。又一方で、正規に働かない、働けない若者達（フリーター&ニート）が増えている。還暦を迎えても子供たちの生活安定を願うが、孫の誕生まで長い時間が必要になっている。親の経済状況も自分たちの生活維持さえ困難になるが、まさか親が子供にパラサイトもできない。つまり団塊世代の親子関係は「親離れしない。子離れしない」という膠着状態になっている。

団塊世代ジュニアの夫婦を見ても、結婚しても子供を作らない、若しくは作っても一人っ子で満足する。生まれた子供は「パーフェクト・チルドレン」完成に向けて金銭と精神を全力投入する。もはや団塊世代が出る術はない。

団塊世代の家族は、夫婦関係、親子関係においての様々な変化や対応が噴出し、前の世代のように、親の権威（所得や思想・価値観）の下、ひとつにまとまって家

族が運営され、その運営のやり方を代えることで親子関係をさらに維持するということができなくなった。現在の日本の家族は、夫婦関係・親子関係という関係そのものが希薄化している。

4) 社会全体のライフスタイルの変化が家族の構造改革を促す

日本の家族の変容はすさまじいほどだが、今後の日本を見るとさらに大きく変わりそうである。ひとつは、人口問題である。日本の人口は、2007年から減少することが確実で、人口減社会に突入する。そこで明らかになるのは子供が少なくなり、老人が増えるという姿だ。現状の雇用制度が続く事を前提とすれば、現役から非現役世代が多くなりすぎる社会になるということである。単身世帯や夫婦ふたりだけ二世帯が膨大になる。子供や親と同居する世帯は地方若しくは郊外など限られた地域に限定されるかもしれない。子供が少ないという社会が20年くらい続くことになれば当然夫婦関係や親子関係は大きく変わる。関係なし家族が誕生するのか、若しくは極めて密度が高く絆の深い夫婦関係や親子関係家族が浮上するかも知れない。

もうひとつは、現在の日本の社会での家族の長期的トレンドの更なる波及問題である。日本の家族の長期的変化トレンドを見ると、家族は量から質へ、複から単へ、内から外へとベクトルは向かっている。親子関係、夫婦関係、親族関係は関係そのものは無意味化されつつある。

今後予想される社会的ライフスタイルの動向、例えば、

- ①女性の職場進出は増加、地位、収入が上昇し、男性に近づく
- ②男女とも労働時間が減少、自分で自由に使える時間が増す
- ③家族機能の外部化、家事労働合理化、家庭外から財・サービスを購入
- ④福祉の有料化、民間の福祉サービス充実
- ⑤国内外をとわず、移動し、住居を変更する人が多くなる
- ⑥眠らぬ消費社会（深夜営業サービス・買い物・医療・行政・金融など）
- ⑦IT・情報化で生活が変わる

これらは、今まで日本の家族の進化（脱近代化家族）を妨げてきた、例えば、夫は収入を得てお金を家に入れるとか、家事は女性の当然の仕事とか、老人の世話は家族ですべきだと思ふこと、社会的責任を家族内でとる事などを当たり前とすること、に対する挑戦的な出来事になる可能性が大である。

日本の社会の様々な分野で構造改革が叫ばれているが、日本の家族の構造改革は、このような外部的压力、あるいは具体的で個人的な損得勘定に関係する出来事が大きな動機となって進行するのではなかろうか。但し、あらゆる構造改革と同様、その行く先や目標は見えてこない。

第Ⅱ部 多様化する日本の家族

生活価値観の多様化に混乱する日本の家族

Ⅱ-1 世代別に見る現代家族の現状及びその比較—読売広告社「Canvass 調査」から— —団塊ジュニア世帯家族vs団塊世代世帯家族vs高齢者世帯家族—

1. 家族生活における満足度について
2. 生活分野別世代満足度
3. 生活分野別に見た不満度
4. 世代別世帯で見た生活関心分野
5. 世代別に見たお金をかけても充実させたい生活分野
6. 世代別に見た家庭生活の意識・態度
7. 結婚・恋愛に関する意識(既婚者、未婚者)

Ⅱ-2 世帯形成拡大と解体の方向—進むニッポンの家族の解体と分化—

1. 世帯の関係はどう変化したのか
2. 世帯の拡大と分散化の状況
3. 世帯の形成に関する意識の変化

Ⅱ-3 家族の変質とそのトレンド

1. 家族の変質
2. 家族機能の変容—伝統家族と現代家族

Ⅱ-4 「家族の姿」 海外比較—諸外国と日本の家族類型比較

1. 高齢者のいる世帯の家族形態・海外比較
2. 社会の変化と家族の変貌・海外比較
3. 家族の構造について・海外比較
4. 家族ライフサイクル・海外比較

II-1 世代別に見る現代日本の家族

読広「Canvass調査」アンケート結果から

—団塊ジュニア世帯家族vs団塊世代世帯家族vs高齢者世帯家族—

現代の日本家族は、成長する日本社会でその礎として機能してきた。しかし、戦後 60 年という還暦を迎えた日本の社会は、一方で、少子高齢社会化が進展し、日本の社会の成長モデル家族として大いに貢献した核家族(夫婦と子供からなる世帯)はシニア化し、夫婦だけの世帯や単身世帯へと移行しはじめている。さらに、2007 年から数年間にわたり毎年約 200 万人以上の団塊世代の 60 歳還暦で、家族のシニア化は待たなしの状態にはいる。このように日本の家族は、今大きな転換期にあるわけだが、家族については、一般論としては、経済情勢の悪化や社会制度の機能不全などで、将来に対する不安がはびこっていると多くの調査で指摘されている。

しかし、全ての日本の家族がそれに当てはまるわけではない。日本の社会における家族を見ると、常に社会をリードしてきた団塊世代(現在 50 歳代後半)や団塊ジュニアの家族(現在 30 歳代前半)は、今までとは違った家族意識あるいは行動があるはずだ。

消えた中流社会意識、失われる核家族とは言え団塊世代や団塊ジュニアのボリューム層は今後の社会でも大いなる存在として君臨する。現代の日本の家族像を従来のように一般的に平均的に認識することは問題である。それぞれの世代家族が、実際にどのような意識で生活をしているのか、世代間でそのような家族意識や行動の違いを確認しておく事が重要である。

ここでは、一般的に豊かな生活をしていると言われていたシニア層(60 歳以上)の家族と団塊世代を含む「50～59 歳」の家族と団塊ジュニアが含まれ「30～39 歳」、また、どちらにも属さないが社会の実質的な中心的存在である「40～49 歳」の家族について、それぞれの生活の満足度や生活意識、家族行動について、読広「生活定点調査 (Canvass)」をもとに比較検討する。

読売広告社読広「生活定点調査 (Canvass)」について

■調査の概要

- ・ 調査目的 現代生活者の実態の定点観測
- ・ 調査対 東京 30 km 圏、大阪 20 km 圏内に居住する満 13 歳から 64 歳の一般男女
- ・ 標本数 1,600 サンプル (東京圏 1,000、大阪圏 600 名)
- ・ 標本抽出方法 エリアサンプリング
- ・ 調査方法 留置法
- ・ 調査時期 2003 年 11 月

■主な調査項目

- ・ 生活全般について／包括的な意識(幸福感、満足度、信頼)と今後の予測 世の中の感じ
- ・ 生活時間行動／平日・休日の生活行動の時間帯
- ・ 生活意識・態度、商品の購入／衣食住～買物、余暇、健康、情報など分野別意識態度、商品購入

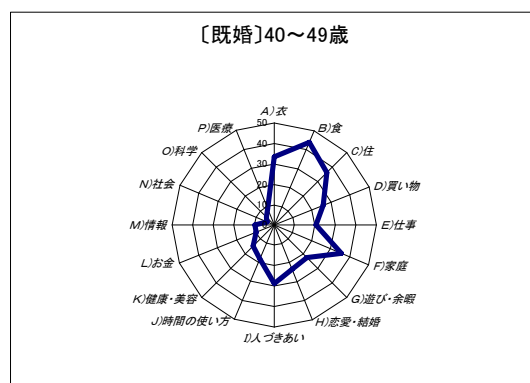
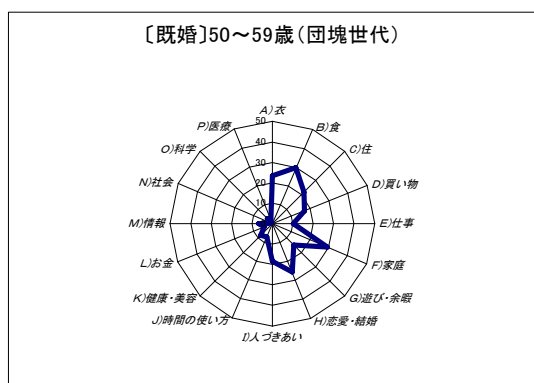
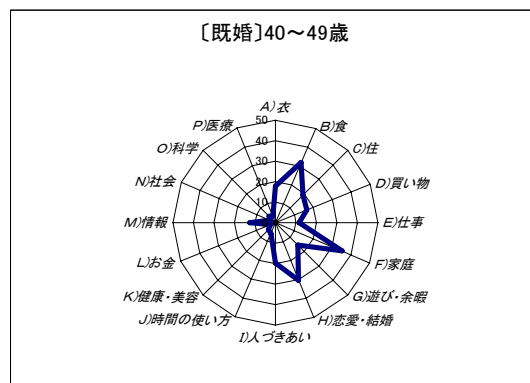
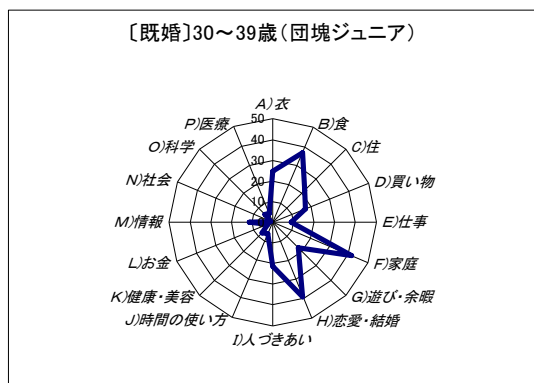
1. 家族生活における満足度について

あなたは現在、つぎにあげた分野にどの程度満足していますか。a～rのそれぞれについて、あなたの満足の程度をお知らせください。(各SA)

—「社会」「医療」「お金」の満足度は低い「住」生活の満足度はシニアが高い

- ・満足度が比較高い分野は家庭「恋愛・結婚」「食」分野になっているが、「医療」「科学」「社会」「健康・美容」「お金」については全般的に満足度はかなり低い。
- ・シニア 60 歳以上の世代の家族で「食」「住」「家庭」「人づきあい」の分野での満足度が高いのに対して、団塊、団塊ジュニア、その他の「住」や「仕事」の生活分野での満足度は低い。
- ・団塊世代や団塊ジュニア世代で満足度が高いのは「家庭」「恋愛・結婚」「食」の生活分野となっているが、シニア世代では「時間の使い方」や「住」の生活分野で他の世代との違いがはっきり見て取れる。
- ・「家庭」に対する満足度は、団塊ジュニア世代は満足度 40 ポイントを超えるのに対して「団塊世代は 30 ポイントとなり 10 ポイント満足度は下回る。世代別に大きな違いが見られる。
- ・「時間の使い方について」はシニア世代の満足度の高さが目立つ。

—家族生活における満足度—

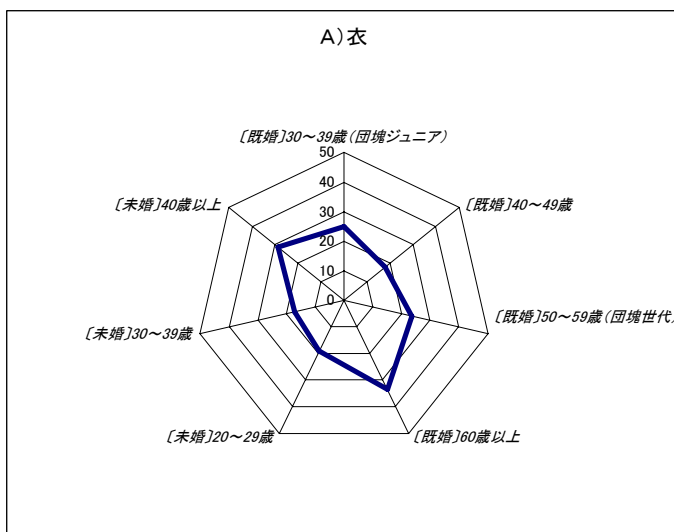


2. 生活分野別世代満足度

あなたは現在、つぎにあげた分野にどの程度満足していますか。a～rのそれぞれについて、あなたの満足の程度をお知らせください。(各SA)

A)衣生活に関して

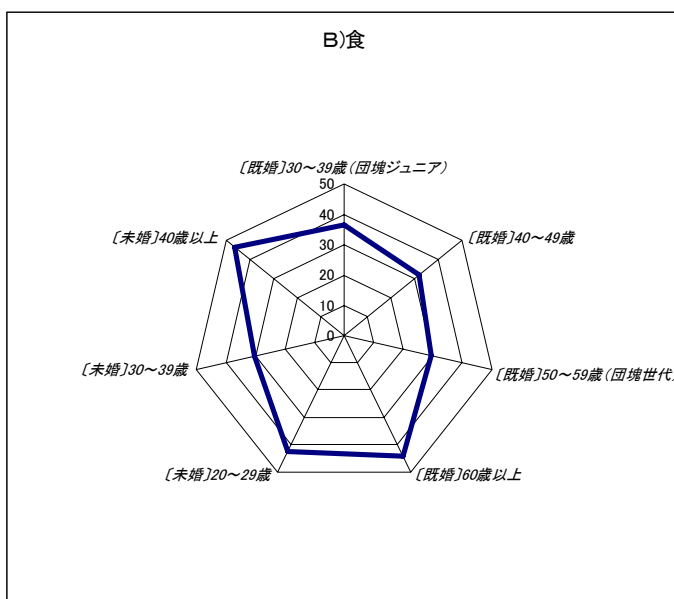
- 全般的に満足度は低い
- 特に中高年(40～49歳)世代の満足度は低い



- ・概ね「衣生活」に関しては、満足度は30ポイントを下回り満足度は高くない。
- ・但し、シニア60歳以上の既婚者は30ポイントを超えている。衣に関しては、シニア世代はあきらめ気味。
- ・子供の成長あるいは本人の体型の変化などであう洋服がないなど、中高年既婚者世代の満足度は低い。
- ・ファッション意欲のある若い世代も満足度は低い。

B)食生活に関して

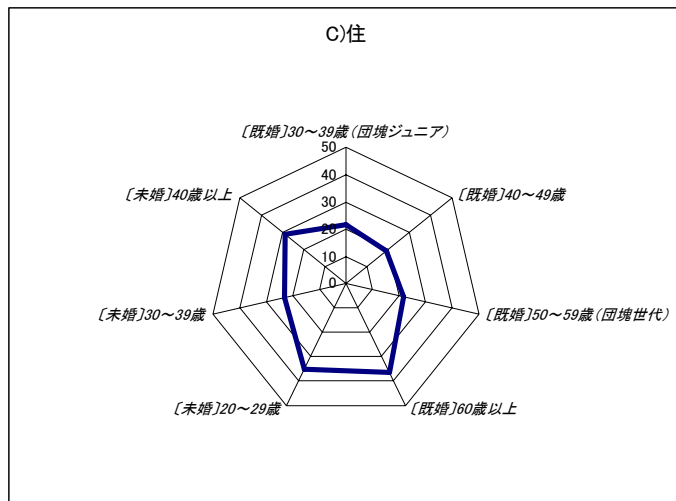
- 若い夫婦、老夫婦は満足度が高く、中高年や団塊世代の既婚、30歳台独身者の満足度は低い



- ・食生活に関しては、満足度は衣生活より上回っている。
- ・世代別で見ると団塊ジュニア、シニア世代の満足度が高い。
- ・中高年、団塊世代の既婚者の満足度が低い、家族構成が大きな子供がいたり仕事でまともに食事ができないことがあるようだ。
- ・30～39歳の未婚者の満足度は低い。グルメな独身貴族やあるいは自炊生活の疲れが伺える。

C) 住生活に関して

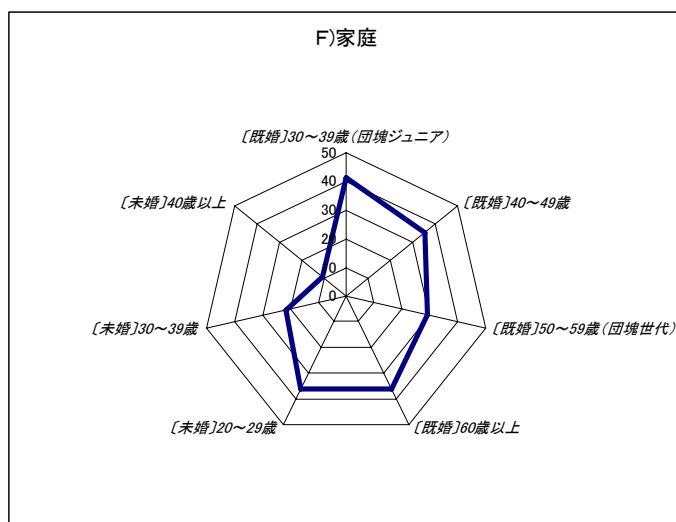
満足度の高いシニア既婚と 20 歳台の未婚者住宅ローンや狭い住宅などで満足度が低い中年既婚者



- ・ 住生活の満足度については「衣生活」同様に満足度は高くはない。
- ・ しかし、シニア 60 歳以上の既婚者と未婚 20 歳台の満足度は、他の世代に比べかなりの満足度を感じている。
- ・ 中高年や団塊世代の既婚者は子供の成長に合わせること、あるいは住宅ローンを抱えるなど満足度はかなり低い。

F) 家庭生活に関して

団塊世代既婚者の満足度は低いが、シニア既婚者と 20 歳台未婚者の満足度は共に高い



- ・ 「家庭」に対する満足度は、団塊ジュニア世代は満足度 40 ポイントを超えるのに対して「団塊世代は 30 ポイントとなり、10 ポイント満足度は下回る。
- ・ 世代別に大きな違いが見られるが、シニア既婚者と 20~29 歳未婚者の満足度が高い。派ラサイト現象が底に見られる。

注;生活満足度の生活分野別での記述は、調査「16 生活分野」のうち、最も世代格差が見られた「衣」「食」「住」「家庭」の生活基本 4 分野に絞った。

3. 生活分野別に見た不満度

あなたは現在、つぎにあげた分野にどの程度不満に思っていますか。a～p のそれぞれについて、あなたの不満の程度をお知らせください。(各 SA)

- 団塊ジュニア世代は、お金、仕事、時間の使い方など多面な社会分野で不満度が高い
- 中年世代は「お金」と「住」に、団塊世代とシニア世代は「お金」「医療」に不満が高い

- ・ 既婚者別に見ると、「30～39歳」の団塊ジュニアグループは、ほとんどの生活分野で不満度が高い。不満度が高いワースト3は、①「社会」(29.3)、②「お金」(25.7) ③「仕事」(15.3) ④「時間の使い方」(14.4)の順になっている。
- ・ 「40～49歳」では、①「社会」(21.3)、②「お金」(19.0)、③「住」(12.8)、④「仕事」(11.2)の順となるが「住」に関しての不満が上がってくる。
- ・ 「50～59歳」の団塊グループは①「社会」(21.3)、②「お金」(19.0)、③「医療」(14.9)、④「仕事」(10.7)となるが、社会への不満など全般的にトーンダウンする。しかし「医療」に対する不満が出てくる。
- ・ 「60歳以上」の既婚者シニアになると、やはり「社会」(18.9)が不満の分野のトップになるが、②「医療」(8.6)、「お金」(8.6) ④「仕事」(8.2)となる。他の世代に比べ不満度は全般に低いスコアになっている。

—生活分野別の不満度(既婚者)—

既婚者	A)衣	B)食	C)住	D)買い物	E)仕事	F)家庭
30～39歳(団塊ジュニア)	5	2.3	10.8	6.3	15.3	1.8
40～49歳	5	1.6	12.8	3.5	11.2	1.9
50～59歳(団塊世代)	1.8	0.9	6.7	2.1	10.7	2.7
60歳以上	0.8	0.8	2.9	2.4	8.2	0.8
既婚者	G)遊び・余暇	H)恋愛・結婚	I)人づきあい	J)時間の使い方	K)健康・美容	
30～39歳(団塊ジュニア)	6.3	2.3	2.7	14.4	12.6	
40～49歳	7	4.3	1.6	10.9	10.1	
50～59歳(団塊世代)	7	5.2	1.2	5.2	6.7	
60歳以上	5.3	2.4	1.6	2.0	3.3	
既婚者	L)お金	M)情報	N)社会	O)科学	P)医療	
30～39歳(団塊ジュニア)	25.7	4.5	29.3	5.4	13.1	
40～49歳	19.0	2.3	21.3	4.7	10.1	
50～59歳(団塊世代)	19.5	2.7	29.0	5.8	14.9	
60歳以上	8.6	3.7	18.8	6.9	8.6	

4. 世代別世帯で見た生活関心分野

—団塊ジュニアファミリーは「遊び・余暇」、団塊世代ファミリーは「健康・美容」

- ①団塊ジュニアを含む既婚] 30～39 歳は、「遊び・余暇」への関心が最も高く、他の分野を圧倒している。子供が小さい事もあって余暇を一緒に愉しむ姿が浮かんでくる。又、「家庭」に関しても強い関心を持ち若さ溢れたファミリー像が垣間見える。
- ②既婚 40 歳代になると関心事は「食」「住」分野が 1. 2 位となっている。子育ても一段落し、自分の生活、自分の時間を大切にすることに関心分野に移る。
- ③団塊世代を含む 50 歳代になると関心分野は「健康・美容」「食」に強く反応している。40 歳代に比べるとさらに自分中心で内にこもる傾向にある。
- ④既婚 60 歳代となると俄然「医療」分野に強い関心が強まる。

「家庭」に関しては若いファミリーほど関心が高く、年長ファミリーは関心が低くなる。「仕事」に関しては、60 歳以上を除いた世代は関心が強い。

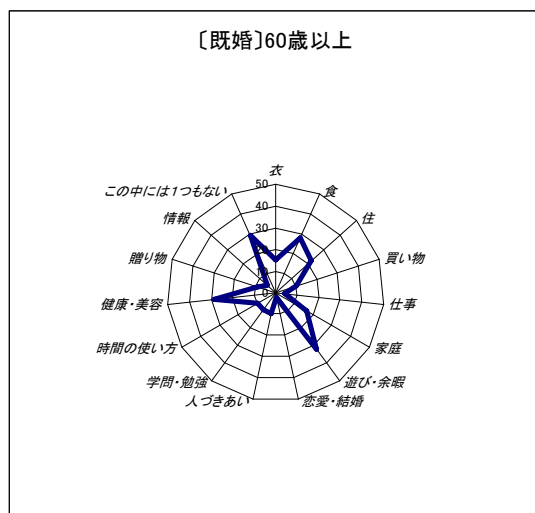
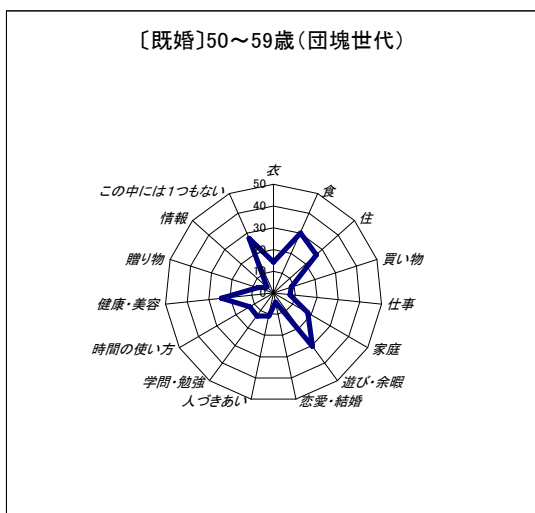
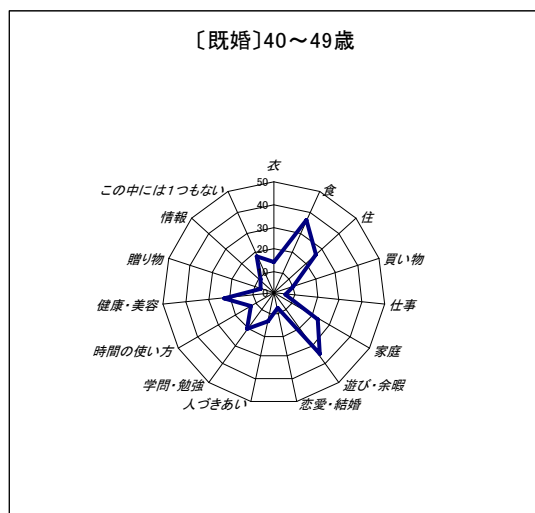
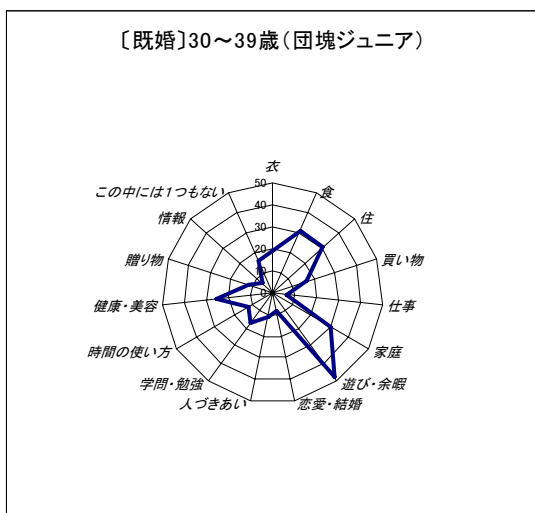
▼世代別(既婚者)生活関心分野ランキング

[既婚]30～39 歳 (団塊ジュニア)		[既婚]40～49 歳		[既婚]50～59 歳 (団塊世代)		[既婚]60 歳以上	
遊び・余暇	85.6	食	77.9	健康・美容	81.7	健康・美容	83.7
家庭	79.3	住	77.9	食	80.8	食	80
食	77.9	家庭	76.7	遊び・余暇	79.9	医療	79.6
住	75.2	遊び・余暇	76	住	77.4	遊び・余暇	76.3
仕事	73.9	仕事	74.8	仕事	75.6	住	72.2
お金	73	健康・美容	69.4	医療	75	時間の使い方	71.4
時間の使い方	72.1	お金	69	家庭	71.3	家庭	70.6
買い物	70.7	時間の使い方	64.7	お金	71.3	人づきあい	70.2
衣	70.3	人づきあい	64.3	情報	69.2	お金	68.6
健康・美容	68	衣	64	衣	68.6	社会	67.8
人づきあい	65.8	学問・勉強	62.8	人づきあい	68.6	情報	67.3
学問・勉強	65.8	情報	61.6	時間の使い方	68.6	衣	66.9
情報	65.8	医療	60.1	社会	66.5	買い物	64.9
医療	63.1	買い物	59.3	学問・勉強	65.5	学問・勉強	60.4
社会	57.7	社会	52.3	買い物	63.1	仕事	60
恋愛・結婚	51.4	贈り物	44.6	贈り物	55.5	贈り物	55.5
贈り物	47.3	恋愛・結婚	43.8	恋愛・結婚	50.9	科学	51
科学	40.5	科学	39.5	科学	50.6	恋愛・結婚	41.2
この中にはもない	0	この中にはもない	1.2	この中にはない	1.2	この中にはもない	3.3

5. 世代別に見たお金をかけても充実させたい生活分野

- どの世代も「遊び・余暇」志向が極めて強い
- 団塊ジュニアは家族志向、40歳代は個人志向
- 団塊世代以上は「時間」「交際」志向が強まる

- ①団塊ジュニアを含む30歳代の既婚者は、「遊び・余暇」について最も高い。子供や家族での海外旅行、テーマパークなどの行動的な生活スタイルを望んでいる。「食」「住」も充実させ「楽しい家庭」づくり志向が強い。
- ②既婚40歳代になると、「遊び・余暇」志向は団塊ジュニアより弱まるが「健康・美容」「食」「人づき合い」など、生活全般の楽しみにお金を使っても充実させたいとしている。
- ③団塊世代を含む50歳代、60歳代以上になって「遊び・余暇」はトップになっているが、モノよりも「時間」「交際」にお金をかけたいという傾向が強い。



6. 世代別に見た家庭生活の意識・態度

1) 家庭生活の意識・態度について～世代間の違いとズレが明らかに～

- 30 歳代ファミリーは休日は家族と一緒に 67%、50 歳代団塊世代は 19%で家族無視
- 子供に甘い 50 歳台・60歳代。子供に厳しい若い家族
- 夫婦共通の趣味はどの世代も少ない日本の家族
- 夫婦別居生活容認派の若い世代、否定派の50歳台以上古今者
- 子供にも配偶者にもあまり尊敬されない日本の家庭

▼家庭生活の意識・態度

既婚者	30～39 歳	40～49 歳	50～59 歳	60 歳以上
休日は家族揃って行動することが多い	67.1	31.8	18.9	24.1
月に1回以上は家族揃って外食をしている	67.6	47.3	32.6	29.8
家族だんらんの時を持つようにしている	70.3	58.9	49.7	43.3
子供のしつけは親の責任だと思う	91.4	91.5	81.4	67.8
子供にも家事の手伝いをさせている	68.5	64.3	44.8	33.5
家族の誕生日や夫婦の結婚記念日などは家族揃って お祝いをしてる	76.1	62.4	43.3	38.4
家庭生活は子供中心である	74.3	52.7	19.5	7.8
夫婦で共通した趣味を持っている	19.8	17.1	18.3	22.4
老後は子供と一緒に暮らしたい	4.5	6.6	7.6	12.7
老後は子供の近くで暮らしたい	42.8	41.1	46.3	42.9
老後は高齢者向けの施設で暮らしたい	5.0	7.0	7.6	8.2
親は子供のために財産を残す必要はない	23.4	29.8	38.7	40.0
子供が希望しなければ大学までいかせる必要はない	55.4	51.6	51.5	40.8
夫婦でも性格が合わなければ無理して結婚生活を続 ける必要はない	45.9	33.7	27.1	19.6
夫(妻)から尊敬されていると思う	19.8	21.3	16.8	22.9
子供から尊敬されていると思う	26.1	31.4	17.1	15.5
この中にはない	0.5	0.4	4.6	4.9

2) 家族行動について

—日本の家族は、どの世代も、「誕生日のお祝い」「お墓参り」で絆を確かめる

- ・「誕生日のお祝い」は、団塊ジュニアを含む30歳代、40歳代既婚者が90%前後で最も高く第一位になっている。50歳代以上も70%台であるが第2位に上がっている。誕生日祝いは日本の家族全体に馴染んだ家族の行動となっている。
- ・また、「墓参り」も家族で一緒にしている行動として、どの世代にも根付いているようだが、夫婦二人だけという要素も入っているようだ。
- ・家族で一緒に行動というのは若い世代は様々な行動で見られるが、年齢を重ねると一緒に行動は極端に少なくなる。
- ・「朝ごはんを食べる」「晩御飯を食べる」行動が一緒という項目で、30歳代、40歳代は低くなっているが、当人も含め家族誰もが忙しい多忙社会の象徴になっている。

▼家族で一緒にしている行動

既婚者	30～39歳 団塊ジュニア	40～49歳	50～59歳 団塊世代	60歳以上
朝ごはんを食べる	38.7	36.8	34.8	62.4
晩ごはんを食べる	61.3	55.4	③61.0	①77.6
テレビをみる	70.3	58.9	53.4	49
音楽をきく	23	7.4	8.2	8.2
休日に出かける	77.9	51.2	32	31.4
洋服や服飾品を買いに行く	53.2	36	24.4	26.9
日帰り旅行に行く	73.4	55	40.2	40
1泊以上の旅行に行く	③83.8	74	55.5	50.2
帰省をする	73.4	65.1	43.6	36.3
初詣をする	82.9	③74.4	60.7	56.3
誕生日のお祝い	①92.3	①86.8	②68.3	③60.8
墓参り	②83.3	②75.6	①72.3	②70.6
この中にはない	0	1.6	5.5	8.6

3)夫がよくしている家事

—ペットの世話で茶を濁す。偉そうにふんぞりかえる団塊世代

—妻を氣遣って団塊ジュニアは「ゴミだし」「浴室掃除」「育児の世話」。

- ・夫がよくしている仕事を見ると、基本的にはあまり手伝いをしていないことがはっきり出ているが、60歳以上の既婚者では、時間のゆとりもあり買い物から布団の上げ下ろし、部屋の掃除、浴室の掃除、窓ガラスふきなど家庭内の仕事を色々こなしている。「男の家政婦」と言ったところも見られる。
- ・団塊世代を含む50歳台になると、「食事のあとかたづけ」もせず、偉そうにふんぞりかえっている様子が見られる。家族にも相手にされずせいぜい「ペットの世話」でごまかしているようだ。
- ・40歳代になると仕事の忙しさにかまけてあまり手伝いをしないようだが、「自分の靴を磨く」など一応自分のファッションにはこだわっているようだ。
- ・団塊ジュニアを含む30歳代を見ると、「子供の育児」を含め、「ゴミだし」「浴室の掃除」など、妻への氣遣いが見られる。

▼夫がよくしている家事

既婚者	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上
フンのあげおろし・ベッドメーカーキング	16.2	16.7	24.5	30.9
朝食のしたく	5	5.4	5.6	8.6
夕食のしたく	5.9	7.8	7.5	7.3
食事の後かたづけ	18.9	17.8	12.7	18.5
日常の買い物	11.7	15.9	16.1	22.7
洗濯	9.5	7.4	6.5	9.4
部屋の掃除	16.2	14.3	14	23.2
浴室の掃除	24.8	19.8	18.6	25.8
アイロンかけ	4.5	6.6	5.6	5.6
靴磨き	9	16.3	12.4	10.7
窓ガラス磨き	7.2	9.7	13	21.5
換気扇の掃除	9.9	12	24.5	28.8
庭の掃除・草取り	9.9	11.6	17.4	28.3
ゴミを出す	33.8	27.9	29.2	32.6
育児	29.3	12.8	1.9	0.9
ペットの世話	9.9	12	18.6	11.2
その他	0	0.4	0.3	1.3
夫は家事をしない	24.8	29.8	29.5	27.5

7. 結婚・恋愛に関する意識(既婚者、未婚者)

—未婚者や若い世代の結婚などに関する意識がころころ変わるのに戸惑う中高年層

- ・既婚者の世代間の結婚や恋愛に関する意識の違いが目立つのは、若い人達は結婚が本人達だけの事として治めたがり、旧い人達は親戚や体裁を気にするといった違いが目立つが、現在の50歳代以上の人達は理解があり、それほど大きな差がない。
- ・離婚や夫婦別姓については大きな意識格差が見える。夫婦別姓などは団塊世代でもぶつからなかった問題でもあり右往左往している状態である。
- ・結婚後については、若い世代は独立したとはいえ、親との関係を良くしておき、経済的援助や子供の世話、あるいは精神的な援助を期待しているが、親の方は自立を期待するなど、意識格差は広がっている。

▼結婚／恋愛に関する意識(既婚者)

	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上
結婚をしなくてもかまわない	47.7	41.9	43.0	25.7
結婚はしなくてはいけないもの	13.1	15.5	17.4	24.9
結婚式は必要なものだ	27.5	26.7	32.0	35.9
結婚式はできたらしたくない	11.3	13.2	11.0	7.3
結婚に仲人は必要である	4.1	7.0	4.9	16.7
できたら仲人はたてたくない	34.7	25.6	29.3	21.2
夫婦別姓に抵抗はない	25.7	25.6	24.1	14.7
離婚をしてもかまわない	38.3	35.7	35.4	21.6
離婚はしてはいけない	23.0	20.5	21.0	24.5
結婚とは家をつぐことだ	9.0	9.7	9.8	13.5
結婚しても女性は仕事を持ったほうがよい	29.7	43.0	44.5	42.9
仕事の関係などで夫婦が別居しても構わない	16.2	17.1	14.6	14.7
結婚したら親と同居したい	5.4	1.6	3.0	4.1
結婚したら親とは同居したくない	36.0	28.7	21.3	15.9
結婚したら親の近くに住みたい	40.1	27.1	29.3	18.0
結婚後親の金銭援助を受けるのは恥ずかしくない	21.6	15.1	14.9	9.4
結婚したら子供がほしい	72.1	65.9	57.0	49.0
結婚しても子供はほしくない	0.9	0.8	1.8	0.8
結婚したら異性の友人とはつきあわないほうがよい	15.8	13.2	12.2	13.5
結婚しても異性の友人とつきあいはかまわない	31.1	28.3	23.2	21.2
結婚と恋愛は別だと思う	36.5	30.6	25.9	21.6
同性に恋愛感情を持つことは不自然でないと思う	12.6	7.0	6.7	4.1
この中にはない	2.7	6.2	9.1	16.3

▼結婚／恋愛に関する意識(未婚者)

	20～29 歳	30～39 歳	40 歳以上
結婚をしなくてもかまわない	41.5	42.9	57.1
結婚はしなくてはいけないもの	20.1	18.8	10.7
結婚式は必要なものだ	36.3	16.1	14.3
結婚式はできたらしたくない	14.8	33.9	17.9
結婚に仲人は必要である	10.6	2.7	10.7
できたら仲人はたてたくない	28.9	50.0	21.4
夫婦別姓に抵抗はない	23.9	34.8	17.9
離婚をしてもかまわない	32.0	37.5	35.7
離婚はしてはいけない	28.5	17.9	7.1
結婚とは家をつぐことだ	7.0	9.8	14.3
結婚しても女性は仕事を持ったほうがよい	40.8	42.9	35.7
仕事の関係などで夫婦が別居しても構わない	14.1	16.1	14.3
結婚したら親と同居したい	6.7	1.8	3.6
結婚したら親とは同居したくない	38.7	33.9	21.4
結婚したら親の近くに住みたい	35.2	33.0	14.3
結婚後親の金銭的援助を受けるのは恥ずかしくない	14.4	20.5	14.3
結婚したら子供がほしい	70.8	58.9	32.1
結婚しても子供はほしくない	4.2	6.3	7.1
結婚したら異性の友人とはつきあわないほうがよい	9.2	11.6	14.3
結婚しても異性の友人とつきあいのなかまわない	51.4	43.8	17.9
結婚と恋愛は別だと思う	47.5	41.1	32.1
同性に恋愛感情を持つことは不自然でないと思う	20.1	15.2	3.6
この中にはない	1.8	5.4	14.3

Ⅱ－２ 世帯形成拡大と解体の方向

—進むニッポンの家族の解体と分化—

1. 世帯の関係はどう変化したのか

国立社会保障・人口問題研究所第2回全国家庭動向調査(1998年7月1日調査から世帯の動向を見る。

この家庭動向調査は、家庭機能の変化の動向や要因を正確に把握するため、家庭の出産、育児環境、老親扶養環境の現状、家族関係の実態を明らかにすることを目的としている。

1) 妻から見る親との関係～子育てが終ると「親の介護」が待っている～

⇒親の長寿化で、夫妻の母親の存在が目立ち、どう親を扶助するか、介護するののかの問題に直面するか家庭が多い(子供の世代は長男長女時代でさらに深刻に)
⇒40歳まで別居(独立した家計世帯)することも多いが、親の近くに居住する傾向が強い。

⇒50歳(団塊世代)過ぎると、子育てが終ると「親の介護」が待っている

- ・妻30歳代までの夫妻の母親は、どちらかがほぼ100%近く生存している。
- ・同居、別居割合は、40歳代前半の妻までは、別居傾向が強まっており、34歳までの妻では8割程度が別居である。とくに、都市的地域でその傾向が強いが、農村的地域でも別居が増加している。
- ・別居の場合は、若年世代ほど親の近くに居住する傾向がある。
- ・妻の年齢別に親の介護の要否をみると、39歳以下の妻では、子育てと介護の両方を担う妻は比較的少ない。

2) 親からみた成人子との関係～面倒見がよい現代の親、子離れできない現代の母親～

⇒母と娘との緊密な関係が、結婚後も続く
(娘がいる世帯といない世帯で大きな差異)
⇒経済的支援、出産や孫の世話でつながる親と子の絆

- ・娘と話をする頻度は、結婚後も週1～2回以上の頻度で7割強が話をしている。
- ・未婚の成人子に対して、男子で3割、女子で4割が生活費などの経済的支援をしている。何らかの経済的支援は、結婚後もかなり高い割合で続いている。
- ・結婚している娘に対しては、出産や孫の世話で3分の2が援助をしている。
- ・同様に、結婚している娘に対して、悩み事の相談相手になっている母が4割弱おり、結婚後も母娘の緊密な関係がうかがえる。

3) 夫婦の役割関係

①妻の家事時間と夫妻の家事分担度～働く妻の負担が大きくなる

⇒経済的補助負担、家事負担増で家庭内での妻の分担が大きくなり、妻の反乱が確実に

⇒職住近接の住まい、頼れる人（親）との隣接・近居が条件に

- ・妻の家事時間は、平日、休日とも30歳代の妻がもっとも長い。
- ・フルタイムで働く主婦で、平日の家事時間が4時間以上もほぼ3割要る。
- ・妻がフルタイムで働いていても、夫の3割弱は全く家事をしない。

②夫妻の育児分担度～頼りにする自分の母親

⇒自分の母親に援助を求める

(三世代家族のメリットの追及、近隣別居が増加)

- ・子どもが1歳未満でも、育児は8割近くが妻に集中、夫のほぼ1割は全く育児をしない。

③夫の育児参加の実態と変化

- ・「寝かしつける」では6割、「食事をさせる」「おむつを替える」などの育児では、夫のほぼ半数がほとんど行っていない。

④夫の家事、育児参加に対する妻の評定～「あて」にできない夫の行動

⇒家庭を粗末にする夫と家庭を大切にす夫の考えや姿勢は、今後の夫婦の形が大きく変わる可能性が大

⇒我慢できない妻。家庭別居、熟年離婚・別居の増加傾向がある

- ・夫の家事、育児に対する妻の評価は、多少の遂行率の上昇にも関わらず、否定的態度が1割増加している。
- ・夫に対する家事、育児への期待度はわずかであるが増加し、妻の要求水準が上がったことにより、夫の遂行率はわずかに上昇したが妻の満足度は低下している。

4) 母親の働き方の「現実と理想」

⇒高学歴化とともに専業主婦化の後退がめだつ

- ・現実でもっとも多いのは、再就職型の5割で、専業主婦型2割、DINKS型は少ない。
- ・理想でも、ほぼ似通った割合。理想と現実の一致度がもっとも高いのは、再就職型である。

5) 家族に関する妻の意識～乳児期の育児以外は化家庭の規範に距離をおく

⇒家庭に関する規範が崩れてきた

(古い家庭規範を崩し切れなかった中高年・団塊世代は戸惑い気味)

(1) 夫婦に関する規範意識

- ・専業主婦の妻は、夫には「稼ぎ手役割と家庭役割」の両方を望み、自分自身

は「家事や育児の専従者」からの回避といった態度がうかがえる。

- ・20歳代の妻では、子どもを持つこと＝社会的認知に対して8割近くが否定的態度、60歳代とは35%の開きがみられる。

(2) 子どもに関する規範意識

- ・乳児期における母親の育児専念は9割に及ぶ圧倒的な支持を得ている。

(3) 老親に関する規範意識

- ・「年をとった親夫婦は息子夫婦と一緒に暮らすのがよい」に対して、否定的態度が1割増加している。

2. 世帯の拡大と分散化の状況はどうなっているのか

ここでは、日本の家族について現在どのような変化の兆候が出ているのか厚生労働省の世帯動向調査結果（第4回世帯動態調査・1999年7月実施）を軸に見てみる。

1) 単独世帯が増えている！～世帯の現状～

この5年間に小家族化・核家族化が進んだ（前回と比較すると、平均世帯規模は3.1人から2.9人へと減少、単独世帯の割合は18.9%から19.8%、核家族の割合は60.8%から62.5%へとそれぞれ上昇。

2) 同居をしなくなったが、同居か別居は大きな問題に！～子と親との居住関係～

[子との居住関係] ⇒親も子との別居を望む

⇒子との居住については、高齢化するほど高くなるが、別居がトレンド。
⇒子供の未婚・晩婚化で40%台が同居。息子との同居が多いが、娘との同居も増えている。（パラサイト現象、親子相互の仲良さ同居の増加）
⇒配偶者との離死別により、継続同居から再同居へシフトする傾向が見られる。

- ・18歳以上の子と同居している人の割合は52.1(58.3)%でいずれも前回に比べ低下。年齢別にみると、男子70-74歳、女子65-69歳で最も同居率が低く、高齢になるほど同居率は上昇。しかし、ほぼ全年齢層で同居率は低下している。
- ・18歳以上の子との同居率は60歳まで60%を維持、60歳以上の同居率は50%を切る。
- ・65歳以上の高齢者の息子との同居率は38.0(41.2)%、娘との同居率は13.2(10.6)%で、前回に比べると娘との同居率は増加。
- ・子と同居している高齢者のなかでの娘との同居の割合は25.4(18.8)%である。
- ・子との同居を「継続同居」と「再同居」に分けると65歳以上では継続同居より再同居が多い。

■ 18歳以上の子との同居率・別居率(%) ■

は団塊世代の世帯

	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65～69歳	70～74歳
同居	64.1	60.7	49.5	45.6	46.5
別居	18.2	30.4	41.9	46.0	45.1
18歳以上の子なし	17.7	8.9	8.6	8.4	8.4

[親との居住関係] ⇒ 「子離れ・親離れ」共に遅れる傾向

⇒長命/長寿化が進行し、高齢者が老親と同居する割合は前回に比べやや上昇し、老人の老人介護は深刻
 ⇒自分の親と同居している人の割合は、30-34歳では男子39.0(41.2%)に対し、女子22.9(21.5%)と結婚を契機として急減し、30歳を境にして男女で差がみられる

- ・ 18歳以上人口のうち、自分の親が少なくとも1人生存している人は68.1(64.1)%である。65歳以上でも8人に1人程度(13.3%)は、親(配偶者の親を含む)が生存している。
- ・ 18歳以上の人で、自分の親と同居している人の割合は男子32.8%、女子22.0%である。年齢別にみると、20-24歳では男女とも80%弱であるが、30-34歳では男子39.0(41.2%)に。
- ・ 配偶者の親と同居する者は、男子4.8(4.0)%、女子16.3(18.0)%であり、妻が夫の親と同居する割合は前回よりわずかに低下している。対し、女子は22.9(21.5)%と結婚を契機として急減し、30歳を境にして男女で差がみられる。
- ・ 同居率は加齢とともに減少するが、65歳以上でも男子4.3(3.3)%、女子1.1(0.8)%が親と同居しており、高齢者が老親と同居する割合は前回に比べやや上昇した。

3) 兄弟姉妹が少なくなって家族構成が大きく変わった

[その他の親族との関係]

⇒兄弟が多かった団塊世代. 親戚付き合い活発
 ⇒少子化が進み、長男長女時代で家族は小さくなった
 ⇒親世代と子世代の家族の構成が大きく変わり、家族付き合い多様かつ複雑に

- ・ 兄弟数は、1960-64年出生コホート以降では漸減傾向にあり、平均兄弟数は1960-64年生まれで2.52人、1975-79年生まれでは2.38人となっている。
- ・ 兄弟数の減少とともに、男子のうち長男の割合は1960-64年出生コホート以降では70%前後に達する。また、女子のうち男きょうだいを含まない姉妹のみの女子は1945-49年生まれの25.3%から1975-79年生まれの44.9%まで増加している。

■ 出生年次別「平均きょうだい数」及び出生年次別「親との続柄」別構成比 ■

出生年次	平均兄弟数	男		女		
		長男	非長男	男兄弟あり	男兄弟なし	
					長女	非長女
総数	3.21	63.0	37.0	63.6	22.3	14.1
～1924	2.94	84.7	15.3	44.6	43.7	11.7
1925～29	3.77	70.9	29.1	64.0	23.1	12.9
1930～34	4.19	60.1	39.9	70.4	17.8	11.8
1935～39	4.31	52.2	47.8	76.3	13.7	10.0
1940～44	4.12	49.0	51.0	72.7	17.0	10.3
1945～49 (団塊世代)	3.70	51.5	48.5	74.7	15.1	10.1
1950～54	3.28	54.8	45.2	70.8	15.5	13.7
1955～59	2.77	63.2	36.8	61.5	21.7	16.8
1960～64	2.52	68.8	31.2	58.8	25.9	15.3
1965～69	2.44	72.3	27.7	58.2	24.9	17.0
1970～74 (団塊ジュニア)	2.43	69.5	30.5	57.6	23.6	18.8
1975～79	2.38	71.7	28.3	55.1	23.3	21.6

3. 世帯の形成に関する意識の変化

1) 親世帯からの離家 ～親元に残るケースが女性 20 代後半で急増

- ・ 女子 25-29 歳では、親元に残る割合がこの 5 年間に 46.2%から 51.3%へ約 5 ポイント上昇している。
- ・ 最初の離家年齢は、男子では 1945-49 年生まれ(20.2 歳)、女子では 1950-54 年生まれ(20.8 歳)を底として、それ以降の出生コーホートでは上昇している。
- ・ 高学歴化によって、最近では、進学離家、就職離家が拮抗しているが、進学離家の割合は 1960 年出生コーホート以降は頭打ちになっている。

2) 結婚が遅く、「離家」が遅れ家の意識が大きく変わる

⇒若い時期 20 歳台前半から「離家」した団塊世代に対して、その子供達は「離家」が遅れており、「家」に対する意識が大きく変わってきている。世代ギャップが今後の団塊夫婦の行方に大きな影響を与える。

⇒継続同居なのか離居なのか、親の「子供に対する」考え方・意識、子供の「親に対する」考え・意識が今後の団塊世代夫婦の選択を左右する。

- この5年間に、女子では20代後半から30代前半の未婚割合が4～5ポイント上昇しており、晩婚化が顕著である。

■平均「離家」年齢の推移及び「そのきっかけ・契機」比率■

出生年次	男					女				
	離家 年齢 (歳)	きっかけ構成比(%)				離家 年齢 (歳)	きっかけ構成比(%)			
		入学 進学	就職 転勤	結婚	その 他		入学 進学	就職 転勤	結婚	その 他
～1924	20.2	10.7	40.8	22.2	26.3	20.5	3.7	17.0	70.4	8.9
1925～29	21.0	14.2	30.4	34.4	20.9	21.4	4.9	17.2	71.0	6.9
1930～34	22.3	10.2	41.3	32.0	16.6	22.0	3.5	15.8	73.1	7.6
1935～39	21.1	12.8	45.8	31.1	10.4	21.9	5.3	21.2	67.4	6.1
1940～44	20.3	11.1	55.6	24.6	8.7	21.1	5.8	30.5	59.5	4.2
1945～49 団塊世代	20.2	23.0	45.0	23.1	8.9	21.1	9.4	30.8	54.6	5.1
1950～54	20.4	27.7	43.6	19.4	9.2	20.8	15.0	28.3	51.8	5.0
1955～59	20.8	33.3	34.2	21.6	10.9	21.5	20.8	17.9	56.2	5.0
1960～64	21.1	33.2	29.0	25.5	12.3	21.9	20.6	18.2	54.6	6.7
1965～69	20.4	35.1	32.0	20.7	12.3	21.8	21.0	17.1	51.3	10.6

3) ライフコースから見た世帯形成

⇒離家しない30代男性、30代後半女性が増える(長男・長女時代の影響など)

- 30代以降では男女とも多数が離家、結婚、出生を経験するが、離家せずに結婚、出生する世帯形成パターンは男子に多く、30代後半では15.9%を占める。
- 今回の調査から仮想コーホートの世帯形成行動を予測すると、将来の35-39歳女子が親元にとどまる割合は現在より高くなる可能性がある。

4) 世帯の解体と縮小

[配偶者との死別・離別]

⇒夫婦のみの世帯は、離別や死別によって、男子は単独世帯へ、女子は「女親と子の世帯」へ移行

- 5年前の配偶関係が有配偶であった者のうち、65歳以上では男子3.4%、女子16.7%が死別へと変化。
- 夫婦のみの世帯で一方が死亡した場合、9割以上は単独世帯に移行している。
- 男子では夫婦のみの世帯や夫婦と子の世帯から「単独世帯」への移行が多く(16.9%、12.4%)、女子では夫婦と子の世帯から「女親と子の世帯」への移行が全体の37.5%を占める。

[子の家離れとエンプティ・ネスト]

⇒「夫婦のみの世帯」が主流になる

- ・継続世帯では、5年間に夫婦と子の世帯から夫婦のみの世帯へ移行した世帯は9.8%であった。このエンプティ・ネストへ移行する割合は60代世帯主で20%を超える。
- ・子をもつ人のうち、すべての子と別れて暮らしているエンプティ・ネスト期の人材は24.5%である。この5年間にこの状態に移行した人は7.5%であり、年齢別には男女とも50代後半がもっとも多い(男子15.1%、女子14.3%)。 _

[高齢者の健康状態と同居相手]

⇒介護から派生する「再同居」が、団塊世代夫婦において大きなテーマになる

- ・要介護の高齢者の属する世帯は、単独世帯、夫婦のみ世帯は少なく、その他の世帯が多い。
- ・子と同居している高齢者について、介護の要・不要別に、同居子に家離れ経験のある者の割合をみると、男女とも要介護高齢者のほうが高く、男子で11.3ポイント、女子で5.7ポイントの差がある。

Ⅱ—3 家族の変質とそのトレンド

現代日本の家族こそ、後世の人から「世紀末から21世紀初頭ほど家族が変容した時代はなかった」といわれるほどの転換期にある。日本の家族の転換がどのようにされていったかを探る。

1. 家族の変質

1) 家族の家族意識の変化

日本人の持つ家族意識は世代別にみると大きく三つに分けられる。

第一期 大正期生まれまでの戦前の貧しい時代を生き抜いた人たちが持つ「家」制度的家族観。

第二期 高度経済成長期に地方から都会に移動し「夫婦中心・子ども中心」を理想とする家族観を持ちつつも、親によって植え付けられた「家」制度的家族観が残る昭和一桁生まれ、団塊の世代までの人たちが持つ過渡期の家族観。

第三期 豊かな社会であふれるモノに囲まれて育った少子世代が持つ「個」を強調する家族観。

あと15年もすれば明治・大正期生まれに代わり、団塊の世代までの人たちが少子世代に介護される時代に移行し、それと共に伝統的家族といわれた家族のありかたも大きく様変わりする。

2) 家族機能の変容——伝統家族と現代家族

家族は社会に対して、また個人に対して、さまざまな働きをしている。そうした働きのことを「機能」(function)という。「機能」は、意図してそういう働きをしていることでなく、結果的にそういう働きをしてしまっていることをさす。現代家族論にさいして、家族が結果的に果たしている機能にはどんなものがあるか。世界的視野からみると、家族には、大きくわけて以下五つの機能があるされている。

①性的機能	結婚という制度は、その範囲内において性を許容するとともに婚外の性を禁止する機能を果たす。これによって性的な秩序が維持されるとともに、子どもを産むことによって、社会の新しい成員を補充する
②社会化機能	家族は子どもを育てて、社会に適応できる人間に教育する機能をもつ。子どもは家族のなかで人間性を形成し、文化を内面化して、社会に適応する能力を身につけていく
③経済機能	共同生活の単位としての家族は生産と消費の単位として機能する
④情緒安定機能	家族がともに住む空間は、外部世界から一線をひいたプライベートな場として定義され、安らぎの場・憩いの場として機能する
⑤福祉機能・保健医療機能	家族は家族成員のうちで働くことのできない病人や老人を扶養・援助する働きをする

これらは伝統的な家族には大なり小なり観察される機能であるが、このような家族機能を現代家族にそのままあてはめるとなると、大きな問題につきあたることになる。どんな問題があるか、国学院大学経済学部教授・野村一夫氏「社会感覚」の指摘によると、現代家族は家族機能の縮小に向かっていると指摘する。

- ①性的機能は、結婚以外の性に対する統制力がゆるんだため、婚前交渉・不倫などのように性的関係がかならずしも夫婦だけの特権的なことでなくなったし、少産化傾向や子どもを産むことが家族の必要条件ではなくなってきた。また経済機能も、生産の場としての機能はほぼ喪失したといえる。生活維持の責任を家族が負う形で、いまはかろうじて家族機能は消費の単位であるにすぎない。
- ②こうした変化のなかで、経済機能のように家族にとってかならずしも本質的でない機能は外部に排出されるが、情緒安定機能や福祉機能のように家族でなければ果たせない専門的な機能の重要性は増すという考え方がある。これは、たとえば多くの人が「安らぎの場」として家族を位置づけ、老後は家族とともにすごしたいと考えている社会意識状態にほぼ対応している。
- ③家族機能に関する考え方は、働きによる家族役割構造の変化であり、高齢化による福祉構造の変化やライフスタイル意識による家族形態の多様化によって変化している。

2. 家族の変容を促したメディアの家族への関与

家族と社会の境界及び家族へのメディアの関与が大きく変わってきたが、それが家族の変化を促してきた。1954年以前、1955年から74年、1975年から94年、1995年以降の4つに時代区分を設定して家族の変化を確認する。

1954年以前

- ・社会は敗戦後の混乱が続いている時期
- ・平均世帯人員は約5人で、いわば「ちゃぶ台」家族（大家族）
- ・家族と社会の境界はあいまい
- ・この時代のメディアはラジオ主体で、NHK連続ラジオドラマ「君の名は」の放送時間帯には女性風呂ががらあき

*この時代、家族へのメディアの関与度は低い

1955年～1974年

- ・産業化とマスメディア化が顕著
- ・団地族が増加し、核家族化が進展し、専業主婦率が増加、合計特殊出生率も2.0強と安定
- ・テレビ普及率が1960年代半ばには90%
- ・テレビが1家に1台の「家メディア」として確立

*家族へのメディアの関与度は相対的には低い

1975年～1994年

- ・高度経済成長を背景に消費化が進み、いわば「個室」家族化が特徴
- ・各自が自己のニーズ充足を優先し、「自閉する」家族関係に
- ・末期は高度経済と所得拡大のヴィジョンの終焉
- ・出生率の低下、未婚化、晩婚化、家族の崩壊が論じられる
- ・核家族化の傾向が進み、いわば「粒子家族」（個室家族）に
- ・テレビでは歌番組とクイズ番組が消滅、深夜番組が増加
- ・個室に1台ずつの「個メディア」が普及
- ・電話も親機と子機に分かれる

1995年以降

- ・情報化、ネットワークメディア化が進み、情報が生産を主導し、消費をつくりだす社会に
- ・PHS、携帯電話、インターネット普及で、移動性とネットワーク性を兼ね備えた家族が増加
- ・空間的距離の有無にかかわらず、家族の親密な関係が成立
- ・在宅就労やSOHOなどの新しい働き方による性別役割分業を超えた家族関係を構築

参考資料:「テレビと家族の50年」

“テレビ的”一家団らんの変遷—(NHK放送研究所)から抜粋

街頭テレビなどの普及初期を除き、人々はテレビ放送のほとんどを家庭内で見てきた。それは、家族という人間関係の中でテレビを見てきたということでもある。またテレビは家庭と社会をつなぐ窓であり、この窓を通して人々は社会のさまざまな出来事や価値観を知った。テレビ放送開始50年を機に、テレビと家庭・家族の関係がどのように変遷してきたのかをたどることが本稿の目的である。この50年間は、家庭内でのテレビ視聴の様子やテレビ視聴時間、社会・経済状況などから大きく3つの時期に区分でき、テレビと家族の関係の変遷は次のようにまとめられる。

第1期 1953～1974年：濃密な家族視聴の誕生

テレビの物珍しさや楽しさから家族がテレビの前に集まり、テレビは戦後の新しい家族の「中心」となった。そしてテレビをみんなで見るのが家族の一体感を高め、テレビを見ながら家族と交流する“テレビ的”一家団らんが生まれることとなった。

第2期 1975～1984年：個別視聴のきざしと家族視聴の変質

家庭内のテレビ台数が増加することに伴い、家族メンバーが個々にテレビを見るようになり、テレビが家族を分散するようになった。その一方で、分散した家族と一緒にいるためのテレビ視聴が併存し、テレビが家族の間をとりもつ役割も果たしていた。

第3期 1985～現在：個別視聴の拡大とテレビとの団らん

一人でテレビを見る個別視聴がさらに進み、人々はテレビ番組の中の出演者と団らんするようになった。たとえ一人でいても、テレビをつけておくことで、あたかも一家団らんしているような雰囲気が醸し出されるようになったのである。第1期に現われた“テレビ的”一家団らんは、「家族みんなで」するものから「家族のメンバー一人ひとりで」するものへと変質しつつある。

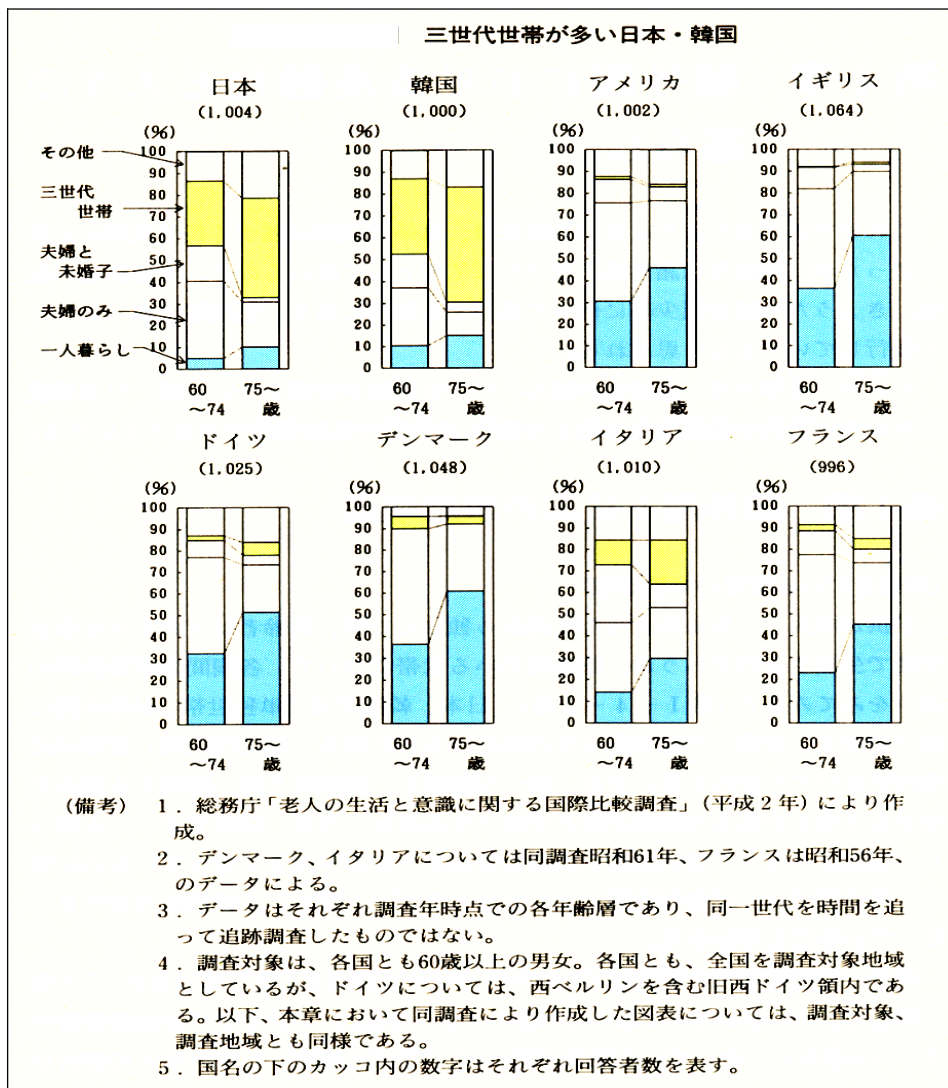
Ⅱ—4 「家族の姿」海外比較 —諸外国と日本の家族類型比較—

世紀の奇跡とかつて言われた日本の戦後社会に生まれ育った日本の家族は、日本の家族は世界的に見て特殊なのか。古い資料だが、国民生活白書「実りある長寿社会に向けて」（平成6年）を参考にしながら日本の家族についてまたその方向性について海外の家族との比較をしてみた。

1. 高齢者のいる世帯の家族形態・海外比較

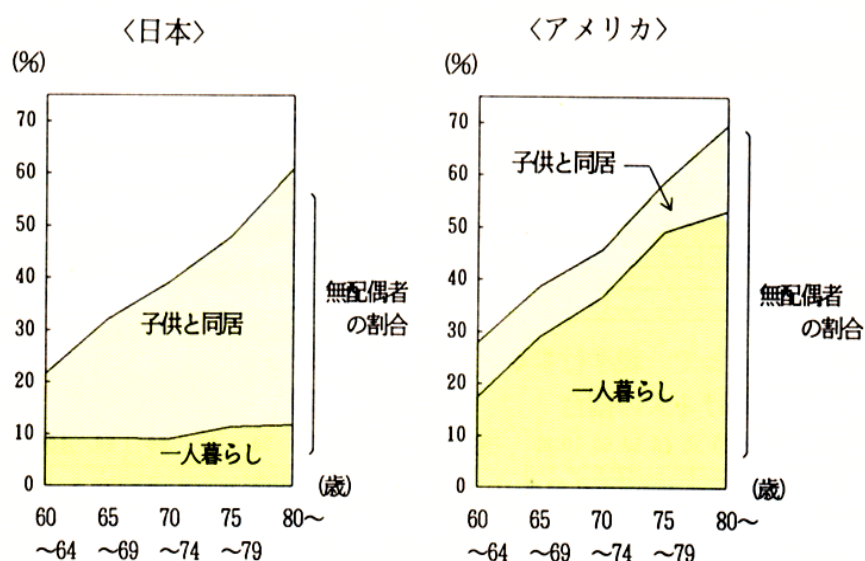
1) 高齢者のいる世帯について、各国間の家族形態の違い

①日本、韓国では「単独世帯」が諸外国に比べ少なく、父母、子供夫婦とその孫といういわゆる「三世代同居」世帯が圧倒的に多いことがわかる。また、60～74歳層と、配偶者と死・離別する割合が高まると考えられる75歳以上層とで比べてみると、日本、韓国では「一人暮らし」世帯よりも「三世代世帯」の割合の高まりの方が大きくなっているのに対し、他の国では「三世代世帯」よりもむしろ「一人暮らし」世帯の方が大きくなっていることがわかる。



②年齢階級別に配偶者のいない人が「一人暮らし」をしているか、「子供と同居」しているかをみると、アメリカでは高齢者層ほど「一人暮らし」をしている割合が高いが、「子供と同居」している人の割合は年齢にかかわらずほぼ一定である。一方、日本では「一人暮らし」の割合はほぼ一定だが、「子供と同居」している割合は高齢者層ほど高くなっていることがわかる。こうした背景には、日本では配偶者と死・離別した場合子供と同居するが、アメリカでは子供とは同居せず、そのまま一人で暮らし続けるといったことが考えられる。

第 I - 4 - 2 図 日本とアメリカでは、対照的な高齢者の家族形態



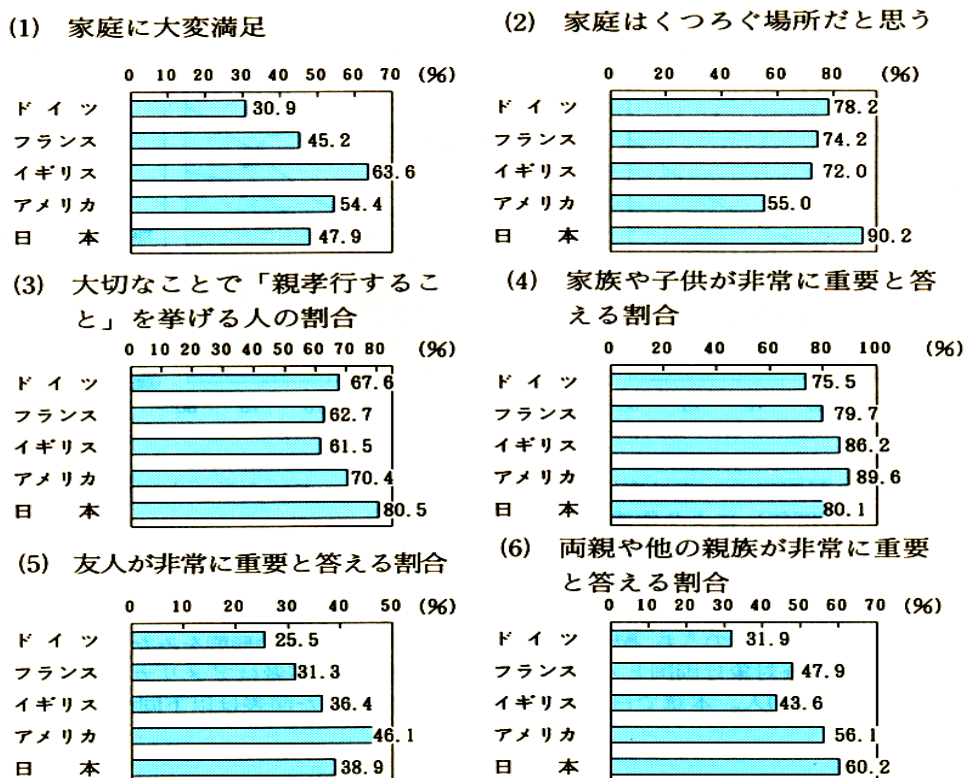
- (備考)
1. 日本については東京都老人総合研究所・ミシガン大学「全国高齢者調査」(1987年)により作成。
 2. アメリカについてはInstitute for Social Research, University of Michigan “AMERICANS’ CHANGING LIVES: WAVE I, 1986”により作成。
 3. 全回答者のうち、配偶者のいない者について家族の形態をみたものである。
 4. 調査対象は両国とも全国60歳以上の男女。回答者はアメリカ1,669人、日本2,200人。本章で日米比較調査により作成した図表は以下同様。

2) 家族形態の違い、同居・別居の社会背景

～日本が諸外国に比べ同居率が高い要因

- ①日本は戦前、長男単独相続と引き替えに家督相続人が老親扶養を引き受けるという直系制家族が主流であったこと、また、韓国においては今日でも儒教思想が受け継がれていて、父親と息子の関係だけをたどる直系家族が基本であることなどがあると思われる。
- ②60歳以上の者の、家族、親族に対する各国の意識を比較してみると、日本では「親孝行すること」や「両親、兄弟、姉妹、親戚」「友人」が非常に大切と答える人の割合は欧米諸国より高いのに対して、「家族や子供が大切」と答える割合はそれと比べると比較的低くなっていることがわかる。すなわち欧米諸国では自分を中心に、自分が作った家族、家庭を重んじているのに対し、日本では自分が作った家庭よりもむしろ、自分が育てられた家庭、家族を重んじる風潮があるとみられる。このことは、日本において「親と同居することが良い」という規範的意識がなお存在していることと関係があると思われる。

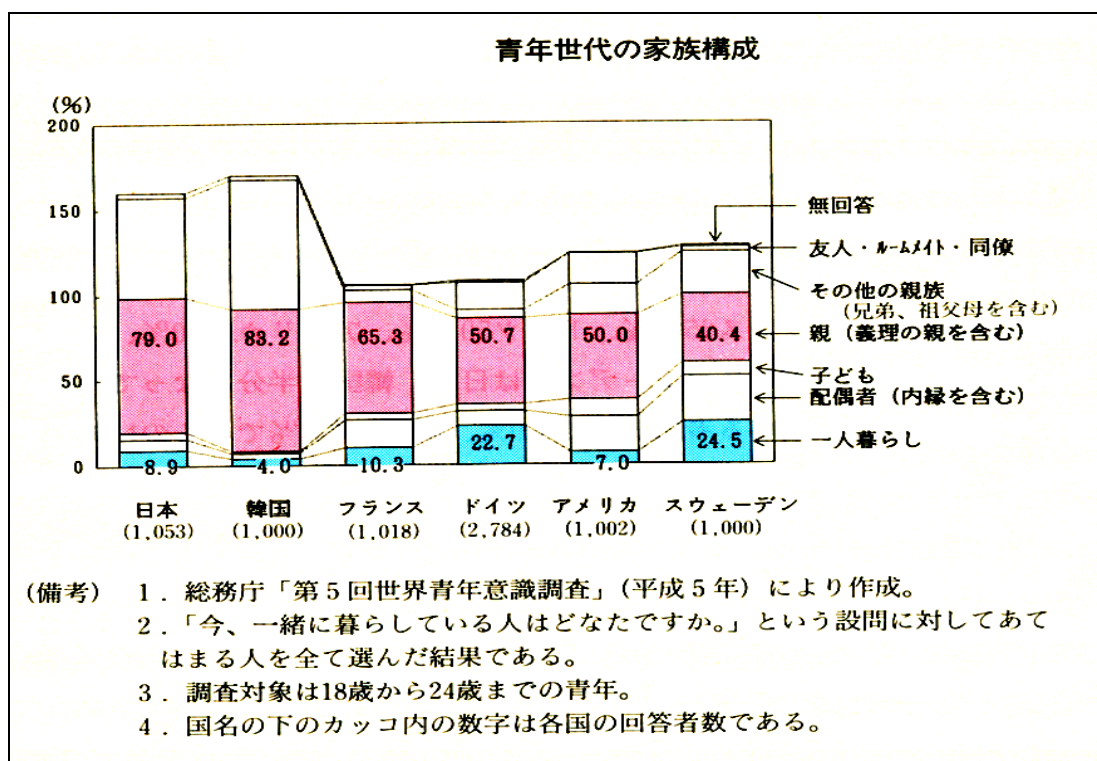
図 家族に対する様々な意識



- (備考) 1. 統計数理研究所「生活と文化に関する世論調査」(1988年)により作成。
 2. 各国とも60歳以上の者の回答。
 3. 調査年はそれぞれ、ドイツ、フランス、イギリスは1987年、アメリカ、日本は1988年、回答者数はそれぞれ、ドイツ188人、フランス217人、イギリス275人、アメリカ469人、日本522人である。

③同時に、日本では9割の者が家庭はくつろぐ場所だと思っているが、実際に家庭に対する満足度は、イギリスやアメリカよりも低く、家庭の情緒的機能に対する期待の高さゆえに満足感が得られない状況がうかがえる。

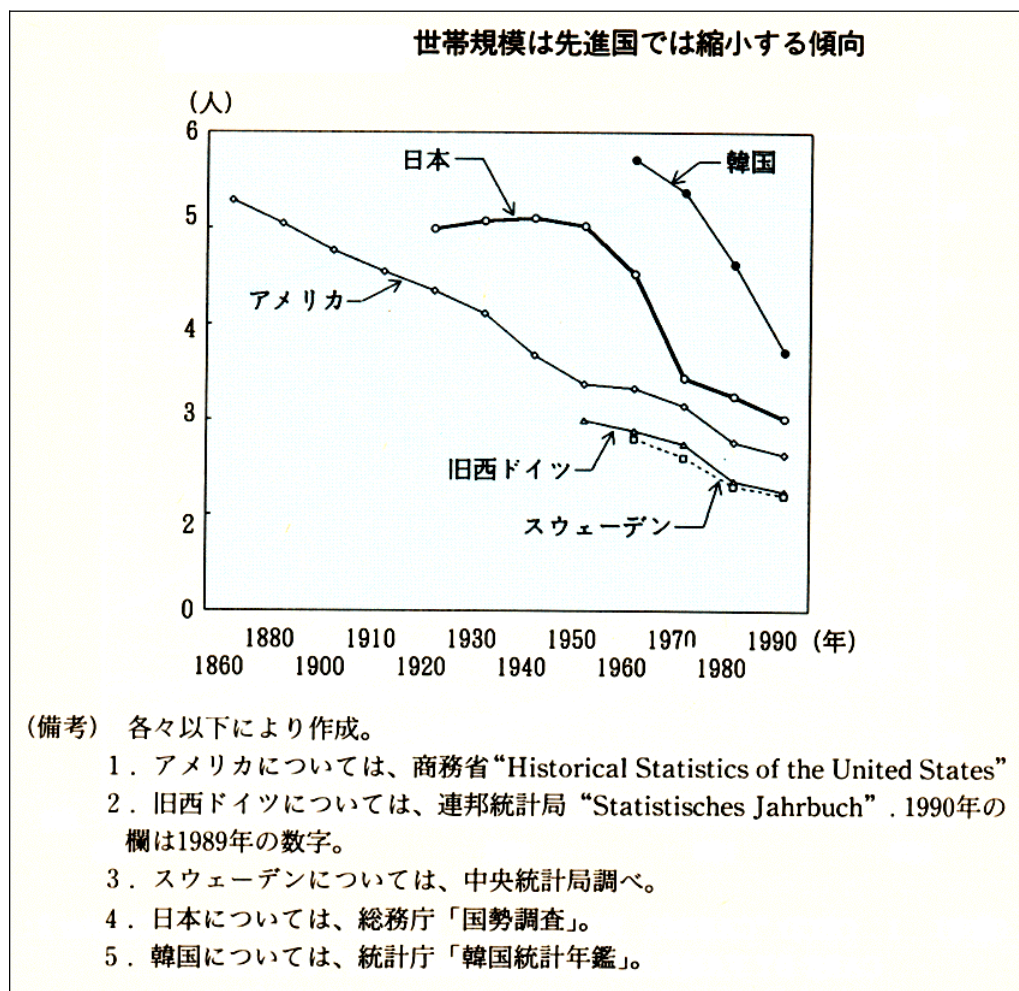
④一方、欧米等、夫婦が家族の結合の中心である国では、子供は成人すると生まれ育った家庭から独立しようとする意識が強い。青年世代の家族形態をみると、親と同居している者は日本79.0%、韓国83.2%いるのに対し、フランス65.3%、ドイツ50.7%、アメリカ50.0%、スウェーデン40.4%、実にスウェーデンでは日本、韓国の半分となっている。また、一人暮らしをしている者は日本で8.9%、韓国で4.0%であるのに対して、ドイツ、スウェーデンでは2割を超えている。また、ドイツ、アメリカでは友人・ルームメイトと同居している者も多くなっている。



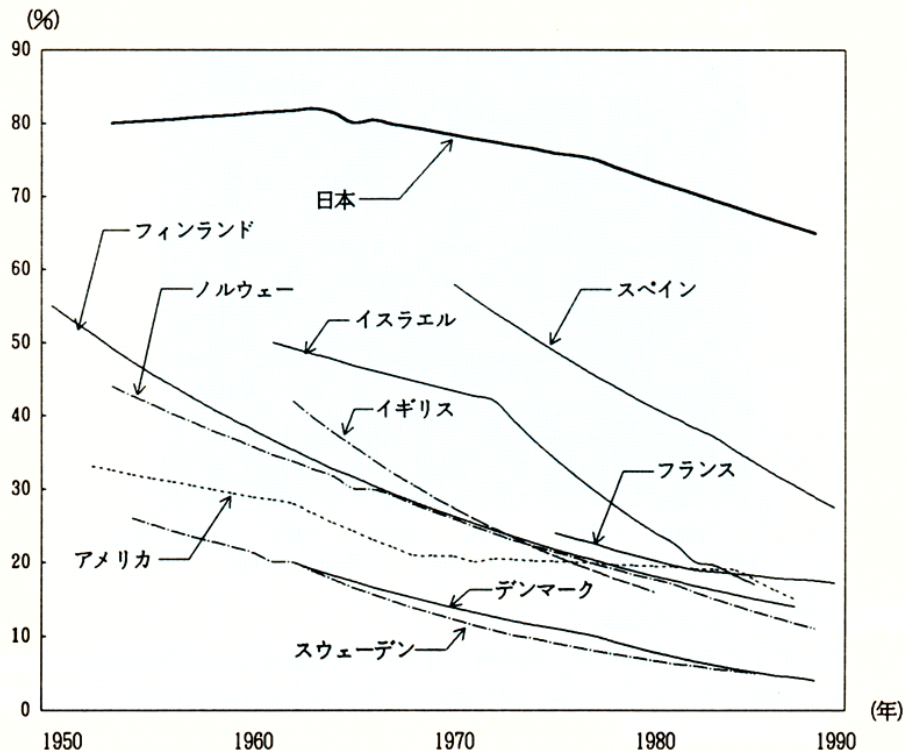
以上みてきたように、日本、韓国では、今日に至るまでに親と同居することに対する意識的な素地があったため、ごく自然に親との同居を選択することができるが、欧米諸国においては、独立を重んずる思想が形成されてきたために、成人し親元を離れることに対する抵抗が少なく、そしてその後も、親子はそれぞれの住居を異にする生活を営み続けるのが自然となっているものと考えられる。

2. 社会の変化と家族の変貌・海外比較

- 1) 長期的にみると、先進諸国における平均世帯規模は全般に縮小する傾向にあるが、この背景として、兄弟数の減少、核家族化、すなわち直系家族制(夫婦、1人の既婚子とその配偶者およびその子供からなる世帯)から夫婦家族制(夫婦と未婚の子からなる世帯)への移行が考えられるが、実際、先進諸国での高齢者とその子供の同居率をみても、全般的に低下傾向にあることがわかる。



低下傾向にある高齢者と子供の同居率



- (備考) 1. OECD “CARING FOR FRAIL ELDERLY PEOPLE—Chapter 2: CARE BY FAMILIES by Gerdt Sundström” をもとに作成。
 2. 各国データは原則として65歳以上総人口に占める割合。
 ノルウェー：1953年 67歳以上 デンマーク：各年とも70歳以上
 フランス：1990年 60歳以上 スウェーデン：1954年 67歳以上

- 2) 日本における平均世帯規模縮小の動向については、平成4年度の国民生活白書でも指摘されているが、韓国における世帯規模縮小の様子をしてみると、この20年の間に「親と子供」「三世代」の世帯は減少しているのに対して、「夫婦のみ」「一人暮らし」の世帯が増えていることがわかる。ちなみに、韓国の高齢者の別居の理由をみると、同居志向の強い韓国においても、大都市では「親の希望」で別居をしている者が4割と比較的多くなっていることがわかる。
- 3) 日本、韓国においては、他の国と比較すれば、依然として子供との同居率は高いものの、次第に低下する傾向にあり、しかもその変化の速さは急速な産業構造の転換とあいまって他の国よりも非常に速くなっている。

家族は一般に、複合家族制(夫婦、複数の既婚子と彼らの配偶者および子供からなる世帯)から、直系家族制→夫婦家族制へと時代を経るにつれて、その規模は縮小するという指摘があるが、そうした説を踏まえれば、日本はまさに現在、欧米型の夫婦家族制への移行期にあるといえよう。

3. 家族の構造について・海外比較

家族内で「強調される関係」は文化によって決定され、第三者がこの二者関係に入り込むと倒錯した三者関係が生まれる (Hoffman, 1981) といわれているが、

- 1) 西洋社会では強調される関係は夫婦関係であり、ひとつの世代内に限定される。しかも平等で親密な夫婦関係が重要視される。その関係に世代間境界を乗り越えて、たとえば子どもが入ってくると問題が生じる。ミニューチンが明確な世代間境界を強調するのもこのような文化的背景から生まれた。
- 2) 日本の伝統的な「家」制度では、「家」を統率し維持する機能からは父-息子関係が強調されたが、情緒的に親密な関係はむしろ母親-息子関係であった。親との親密な関係を保つ夫の元に新妻が嫁入りすると、夫婦関係は夫と夫の親の関係に割り込む「倒錯した三者関係」となってしまう。親密な夫婦関係が保てないので妻は情緒的サポートを自分の子どもに託すので母子関係が強まり、この家族関係のパターンが次の世代へ受け継がれてきた。
- 3) このような家父長制度は数々の問題を含みながらも、戦前までは社会の価値観と一致し、法的にも支持されてきた。しかし戦後、この伝統的な価値観は西洋の価値観の流入と急速な工業化の挑戦を受けてきた。核家族の概念が導入され、新しい世代は教育の機会均等を享受し、個人の独立を求める。しかし、その一方で旧世代の「家」制度の中で育まれた「家族の神話」は、確実に次の世代に受け継がれる。その結果、現在の日本社会には伝統的な「家」制度に基づく価値観と、西洋の個人主義に基づく価値観が共存している。このため伝統的な親子関係と西洋的な夫婦関係という二組の「強調される関係」を持つという不可能なジレンマを負わされている。このことが次の症例によく表れている。

4. 家族ライフサイクル・海外比較

西洋の家族にとって若者が原家族から巣立つこと (Leaving home) が家族ライフサイクル上最も重要な出来事のひとつである。子どもが義務教育を終え、大学などに進学するか就職する時期までに、自立性を獲得して親から心理的にも経済的にも独立することが期待される (Haley, 1980)。その後親子は別々の家族に属するものと考えられる。西洋の価値観では家族のライフサイクルは分化の過程である。

- 1) 日本の価値観では家族ライフサイクルは分化の過程というより、より複雑な人間関係への統合の過程ととらえることができる。西洋と同じ意味での Leaving home は日本の家族には存在しない。もっとも実際に若者が原家族から巣立つ過程には洋の東西に大きな差はない。高校を卒業してから結婚するまで、日本の若者の方が親と同居するケースが多いが、大学や就職のために別に住む場合も多い。しかし日本と西洋の若者の大きく異なる点は、心理的な原家族との関係である。西洋では若者が巣立てばもう原家族からは離脱し、別な家族に属すると考えられる。

日本の家族の場合、一生原家族から離脱することはない。たとえ家を出て経済的、心理的に独立しても実家との心理的な関係は密接に保たれる。

- 2) そのひとつの表れが成人した子世代と親世代の同居である。徐々に変化しつつあるものの、多くの家族にとって年老いた親の世話は、子どもの責任という価値観が受け入れられている (Long, 1987)。それまで別々に居を構えていても、親のどちらかが欠けたり病気になると、親世代と子世代が同居したりあるいは近くに住み同居に準じた形態をとる場合が多い。これは西洋にはみられない日本に独特な家族ライフサイクルの重要な節目である。これは親世代にとっても子世代にとっても大きなインパクトを与える。親世代にとっては現役を退き社会的役割と体の機能の衰えに直面する時期である。また長年連れ添ってきた夫婦との死別という大きな精神的打撃と時期を同じくしている場合もある。成長した子世代にとっては、子どもが学齢期に達し、大学受験、就職、結婚などライフサイクル上重要な出来事と時期が重なる。義理の親子にとってお互いの同居はストレスが大きい。

一方、血のつながる親子にとって子夫婦のうち、同居は以前に経験済みであるが、前回は親が扶養者で子が被扶養者の関係であったのが、今回はその立場が逆転することになる。したがって、以前の親子関係とは異なった別の新しい関係をつくり直さなければならない。

第Ⅲ部 日本の標準モデル家族の変質

団塊ニューファミリー家族の履歴書

団塊世代は、ひとかたまり（「塊」）ではなく、分化してきていることを実態的データに基づき分析。団塊の世代をひとかたまりでは見ることができなくなったこと、そして分化しても、それぞれは巨大な人口数を抱えていること、さらに団塊世代は、生活価値観として多様性や個性化を重視する第一世代であったことなどを確認する。

Ⅲ－1 「テレビホームドラマ」に見るニッポンの家族

～戦後日本の家庭の悲喜劇を投射し続けたTVドラマ

1950年代後半①（昭和20年代後半）	ヒッチコック劇場から始まったテレビドラマ
1950年代後半②（昭和30年代前半）	映画館や舞台の延長としてのドラマが普及
1960年代前半（昭和30年代後半）	「スイートホーム」を理想スタイルとして描いた時代
1960年代後半～1970年代前半（昭和40年代）	「大家族ホームドラマ」盛況
1970年代後半～1980年代前半（昭和50年代）	家族真正面から立ち向かったホームドラマ
1980年代（昭和60年代以降）	男女平等意識のライフスタイルドラマ
1990年代（平成初期の時代）	ホームドラマからトレンドドラマへ。家族が消えた

Ⅲ－2 日本のニュー・ファミリー家族の履歴書

～団塊世代を中心とする戦後60年の家庭生活

①団塊世代の青少年期～中高生、就職・大学生時代

新しい日本の家族を求め自由恋愛・恋愛気分に入る

②団塊世代の若い夫婦時代～20歳代の生活事情

マイホームを夢見、マイカー、カラーテレビ、エアコンを楽しむ新・核家族

③団塊世代の中高年期の生活事情

バブル崩壊、資産の目減り、ローン返済、消費抑制、幻想の豊かな家族

④還暦を迎えるニューファミリー家族の主人公・団塊世代

就業、年金、健康、老後生活の4大不安が待っている

Ⅲ—1 「テレビホームドラマ」に見るニッポンの家族

～戦後日本の家庭の悲喜劇を投射し続けたTVドラマ～

1950年代後半①(昭和20年代後半) —団塊世代の幼児時代—

「夫婦関係・夫と妻」サスペンス・ヒッチコック劇場から始まったテレビドラマ

日本のテレビが本放送を始めたのは1958年(昭和28年)のことである。本放送と共にテレビドラマもスタート。当時は「電気紙芝居」と呼ばれるほどだった。人気番組はスポーツや演劇などのナマ中継であったが、この頃からアメリカの番組が輸入されてくる。アメリカのテレビ映画シリーズが編成され、特にサスペンスが人気であった。それを代表するのが、『ヒッチコック劇場』(日本テレビ・1956～58年)である。代表作は

・『復習』(55年)

妻の(嘘の)ために無実の男を殺すことになる夫の悲劇、ブラックユーモアの世界である。

・『酒蔵』(56年)

夫が妻を殺して地下室に埋め、アメリカに渡ってイギリスの隣人に妻の名で手紙書いて生きてるようにごまかすが、妻宛の手紙に「お申し付けどおり地下室を酒蔵に改造します。」という返事があって愕然とするというものである。

・『完全なる犯罪』(57年)

『ヒッチコック劇場』はいずれも話のひねりやオチが見事である。またブラックユーモアの色合いが濃いのも特徴である。またアメリカのテレビ映画はシリーズものが多かった。

1950年代後半② —団塊世代の少年・少女時代—

映画館や舞台の延長としての日本のドラマが普及

アメリカのテレビ映画シリーズの人気が目立った50年代だが、日本のテレビドラマも後半から普及し始める。しかし、この頃テレビドラマはまだ映画館や、舞台の延長にあつたにすぎなかった。この頃の日本のテレビドラマの特徴は、劇作家、小説家、映画監督、評論家など、様々な分野から、新ジャンルであるテレビドラマ脚本や演出に参加があつたことである。

一方、1958年東京キー局の電波を飛ばす東京タワーが完成し、日本映画界の観客動員数、製作本数はこの年を境に下降線をたどっていく。テレビの側からは「ながら族」が流行語になるように、何かをしながらテレビを見る習慣が生まれることになる。

⇒1950年代の代表作

・『追跡』(1955年NHK)

- ・『ちんどん屋の天使』(1958年/大阪テレビ)
- ・『私は貝になりたい』(1958年10月31日/KRT今のTBS)

これまで映画や演劇が取り上げなかったC級戦犯をモチーフとし、『私は貝になりたい』の事件や登場人物はあくまで主人公の受難に統一されて描かれた。

- ・白坂依志夫(映画シナリオ)『マンモスアワー』(58年/KRT=TBS)
- ・安部公房(小説)『日本の日蝕』(59年/NHK)
- ・大島渚(映画監督)『青春の深き淵より』(60年/関西テレビ)など

1950年代後半～60年代前半(昭和30年代) —団塊世代の青年時代—

「ホーム・スイート・ホーム」を核家族の理想スタイルとして描いた時代

この頃からホームドラマが栄える。アメリカのホームドラマと日本のホームドラマの違いはアメリカが父権でなら、日本は母権であった。当時日本にとって家庭の中心は母でなければならなかった。しかしどの作品もホーム・スイート・ホームと言った核家族を理想のスタイルとして描いた時代であった。形態は核家族、内容はアメリカ式の理想的家族像であった。当時恋人や夫婦と言ったヨコの関係よりも、親子などのタテ関係の方が重要であったことを示している。

⇒代表作

- ・『バス通り裏』(NHK/昭和33年～38年)

バス通り裏の高校教師の赤沢家と美容院経営の川田家の生活をもとに、誰にでも起り得る些細な生活の断片を描いた物語。放送時間帯は月曜から金曜の19:15～19:30であった。

- ・『ママちょっと来て』(日本テレビ/昭和34年～38年)

理想的な家族像を描いた。放送時間帯は日曜19:00から30分のシリーズ。

- ・『咲子さんちょっと』(TBS/昭和36年～40年)

嫁と姑の関係を本音の対立は少なく、平和な雰囲気描かれている。

- ・『パパはなんでも知っている』、『アイ・ラブ・ルーシー』

この頃相変わらずアメリカのテレビドラマも人気であり、アメリカ製ホームコメディが放送されていた。人々はこれらの作品を見て外国に憧れた。特にアメリカの生活形態であるDKは憧れそのものだった。いずれもシリーズものの代表作である。

シリーズ以外では、単発のドラマ枠では「日曜劇場」(KRT=TBS)が1956年から開始、1961年からは現在もなお放送されているNHKの朝の「テレビ小説」が開始された。

1960年代後半～70年代前半(昭和40年代) —団塊世代がニューファミリーになった時代—

願望あるいは現実逃避の家族像が浮かび上がる「大家族ホームドラマ」

1971年全世帯の56・5%が核家族となっていた。しかしこの頃ホームドラマでは、〈大家族ホームドラマ〉が人気を呼ぶ。

⇒1960年代後半（昭和40年代前半）代表作

この時期のドラマは昭和30年代への反作用の色彩が濃い。都市化と住宅難に伴う核家族化、女性中心スタイル、この二点をやんわりと否定したのである。ドラマを現実の反世界として見れば、願望あるいは現実逃避の家族像が浮かび上がってくる。

- ・『七人の孫』（昭和39年～41年）
祖父を中心にその子、その孫7人が登場。明治・大正・昭和と3代の語り軸とした物語。
- ・『ただいま11人』（昭和39年～41年）
両親とその子ども、二男七女という11人の大家族の様子を描いた。
- ・『肝っ玉かあさん』（昭和42・44・46年）
肝っ玉母さんはそば屋を取り仕切るまさにゆるぎない一回の大黒柱である。家族は長男長女、同居人夫婦、長男の恋人、その両親など11人である。

いずれもTBSから放送された1時間枠のシリーズもの

⇒1970年代前半（昭和40年代後半）代表作

時代は高度経済成長期の坂を登っていた。40年代の家族はアメリカ輸入型から日本型への復活と変化した。理想像ではなく、「理解可能な人間の存在」をホームドラマの中に見出した。一方、高度経済成長期の流れとともに1970年代前半は「青春学園もの」が人気だった。『飛び出せ！青春』（1972年/NTV）、『われら青春！』（1974年/NTV）が代表作であり、「明るく楽しく恋愛を」をテーマとしていた。

- ・『時間ですよ』（昭和45年～48年/TBS）
下町の風呂屋のオカミさん、亭主。経営者と使用人の人間模様が描かれた。
- ・『ありがとう』（昭和45年～50年/TBS）
医師の大家族と看護婦親子やりとりが評判となる。
- ・向田邦子の作品『だいこんの花』（昭和47年・1972年～1973年/テレビ朝日）
- ・『寺内貫太郎一家』（昭和49年・1974年/TBS）

しかし昭和48年日本はオイルショックに襲われる。その昭和48年に山田太一脚本の『それぞれの秋』が放送される。次男の目を通し、父、母、息子、娘のそれぞれの家族には話し合いでは解決できない事情が重く描かれている。この作品を機にホームドラマが一変する。

1970年代後半～1980年代前半(昭和50年代) —巨大な団塊ファミリーの登場—

理想像ではなく、現実の家族の悲喜劇に真正面から立ち向かったホームドラマ

昭和50年代のドラマは所謂「辛口ドラマ」と呼ばれ、オイルショック後の不況が顕在化し「トンネル不況」(昭和52年)のもとで、あらためて家族の絆の存在基盤が問いただされた。1970年代後半になり『それぞれの秋』や『岸辺のアルバム』など、ホームドラマが家庭の崩壊を描き、その一方で恋愛ものは「純愛メロドラマ」から「困難に立ち向かう恋愛」へと変化する。

⇒1970年代後半(昭和50年代前半)の代表作

- ・『となりの芝生』(昭和51年/NHK)

脚本橋田壽賀子。この作品は今までのハッピーホームドラマに終止符を打った。マイホームをやっとのことで建てた次男の家に、母親の同居が問題で起る事件を赤裸々に描いた。嫁と姑の対立も、本音の対立が描かれていた。

- ・『岸辺のアルバム』(昭和52年/TBS)

脚本山田太一。このドラマは堤防の決壊で流失するマイホームの映像に、ジャニス・イアン「Will you dance」のテーマ曲が流れて始まる。商社マンの父、母、娘、息子の一見幸せそうな家族がもろく崩壊する姿を描いた。父の会社の営業不振、姉の妊娠・中絶、母に何気ない浮気などを経てバラバラになっていく。

- ・『北の国から』(フジ昭和56年～)

北海道・富良野を舞台にした、父、息子、娘の3人の奮闘記。

⇒1980年代前半(昭和50年代後半)の代表作

昭和50年代のホームドラマに見られる家庭崩壊はテレビドラマの人間関係の重点をタテ関係からヨコ関係へと導いた。

- ・『おしん』(昭和58年/NHK)

橋田壽賀子脚本。主人公のおしんは貧しさに耐え、奉公に耐え、成長しては家族の嫁いびりに耐える。おしんの耐えねばならなかった、戦前の時代が押しつけた理不尽なものを描いた。が、なぜかそれが飽食と言われるこの時代に受け入れられ、その評判は「おしん」ブームという言葉まで引き起こした。

- ・『積み木くずし』(昭和58年/TBS)

主人公は中学一年生の少女。女番長からリンチを受けたことがきっかけで、少女はグレ始める。やがて両親と彼女の葛藤が繰り返される。登校拒否・家庭内暴力という社会現象がホームドラマに直線的に描かれた。

その後、テレビドラマはトレンドードラマ時代へと突入していく。

ホームドラマが崩壊してきた裏側で、恋愛ものが徐々に人気を上げてきた。1973年のオイルショック以降不景気になり、恋愛ドラマの形も変化する。

■トレンドードラマの登場 「赤のシリーズ」(1974年～1980年/TBS)

1970年代後半(昭和50年代前半)恋愛ものの代表作

山口百恵主演。『赤い迷路』に始まり、『赤い疑惑』以降、『赤い死線』で終了する。『赤い疑惑』は、白血病に冒された少女が医学生と愛しあう。が、少女には出生の秘密があり、恋人の医学生とは異母兄弟であった。

1980年代(昭和60年代以降) —団塊世代の女性・主婦全盛の時代。自立意識が目覚める—

男女平等意識のライフスタイルドラマとしてのホームドラマに

『金曜日の妻たちへ』。家族や兄弟などの今までのタテ関係もすべてヨコ関係で眺めてみようというホームドラマ。夫社会と妻社会はあくまで平等に描かれていた。これが例えドラマの世界でも人々が希求するライフスタイルだった。ファッションなど誰もが生活に取り入れられる、「ライフスタイル化」したテレビドラマは、その後トレンドードラマへとになっていく。そして、トレンドードラマの中心は今までのホームドラマではなく恋愛ものであった。

⇒1980年代後半の代表作

- ・『金曜日の妻たちへ』(1983年 84年 85年/TBS)

脚本鎌田敏夫。30代の核家族3組(それぞれサラリーマン、公務員、自営業)の男女の恋愛を明るく軽くサラッと描き話題となった。舞台は大都市郊外の外観ばかりが美しい住宅街。インテリアはかつての憧れであったDKであった。『金曜の妻たちへ』は家族や兄弟などの今までのタテ関係もすべてヨコ関係で眺めてみようというホームドラマである。

特にパートⅢ(1985年)では、妻たちの「不倫」をファッションとして定着させた。ドラマの中では夫社会と妻社会はあくまで平等に描かれていた。

- ・『君の瞳を逮捕する』(1988年/フジ)
- ・『ハートに火をつけて!』(1989年/フジ)

情報源であったテレビドラマは常にトレンドーでなければならないとばかりにカタカナ職業の主人公、オシャレな小物、インテリア、身近な恋愛を溢れさせてきた。都市化の生活はモノ志向で飾られ、仕事以外生活を描く。ただ単なるオシャレということを追求めた中の愛は、恐ろしく利己的で、わがままなものであった。

ホームドラマから 트렌ディード라마へ。家族が消えた

バブルが崩壊し、長い不景気へと突入していく90年代。 트렌ディード라마はやはりあくまでも理想だと目覚め、ポスト・ 트렌ディード라마へと変化していく。ポスト・ 트렌ディード라마は、現実とは一定の距離を置いてはいるが、単なる理想や異常ではなく、現実にあるという人々の刺激剂的役割となった。

⇒1990年代前半の代表作

- ・『東京ラブストーリー』(1991年/フジ)
- ・『101回目のプロポーズ』(1991年/フジ)
- ・『ずっとあなたが好きだった』(1992年/TBS)

内容は主人公の冬彦と美和はお見合い結婚をするが、いざ結婚してみると夫の冬彦はとんでもないマザコン男。ことごとく母親に頼る冬彦に妻の美和は耐え続ける。この時代のテレビドラマの共通点として描かれる男役は頼りなく、さえない男が多い。それに対し、女役は活発でわがままである。

これは今まで恋愛が実らない原因が、周りの環境から本人たちの内面に問題を持つようになったからである。

お茶の間にテレビが当たり前となってくると、映画のような全く別世界の虚構物語よりも、慣れ親しんだ架空の空間を楽しむものとなる。それは家庭の理想像であり、安定剤であり、生活の刺激剤へと変化してきた。戦後50数年間を経て、家庭・家族に緊張感が失われ、テレビのホームドラマは家庭から個人へのテーマに変わった。唯一現在でも高視聴率を誇っているのは「渡る世間は鬼ばかり」である。

「渡る世間は鬼ばかり」に描かれる日本の家族の変化

高視聴率を誇るドラマ「渡る世間は鬼ばかり」はこうした日本の家族の変化を見事に映し出している。5人の姉妹を中心に枝葉のように様々な家族の形やその課題を描くこのドラマでも離婚や再婚、血の繋がらない子供を抱えるステップファミリーが取り上げられるようになった。結婚しない若者の急増(晩婚化)、それに伴う少子化が叫ばれる一方で、これまで余り取り上げられることがなかった再婚家族という新たな家族の形が確実に日本でも増え続けている。

<参考文献>

岩男壽美子『テレビドラマのメッセージ 社会学的分析』

鳥山 拓『テレビドラマ・映画の世界』(早稲田大学出版部 1993)

佐怒賀三夫『テレビドラマ史』(日本放送出版協会 1978)

Ⅲ－２ 日本のニュー・ファミリー家族の履歴書

～団塊世代を中心とする戦後60年の家庭生活～

①団塊世代の“青少年期”

団塊世代の青少年期～中高生、就職・大学生時代～

新しい日本の家族を求め自由恋愛・恋愛気分に入る

昭和30年(1955年)から昭和48年(1973年)が「軌跡の成長」と呼ばれた高度経済成長期に当たるが、この時期、団塊世代は、産業化の中で良質な大量の労働力として社会に貢献する一方、ファッションから音楽などヤング消費市場も作り上げた。

兄弟姉妹数は4～5人で、地方の多くの次男三男、次女三女たちが都会へ就職や大学進学へと移動した。そして、都市部では、若者の大量流入し、自由な生活を楽しんだ。多くの若者がふれあい、結婚までの恋愛気分若者は浮かれ、また、ドライブ、エレキ、ミニスカート、学園闘争など団塊世代の若者たちが「騒々しい若者たち」として社会に躍り出た。

昭和40年(1965)10月から戦後ベビー・ブーマーを中核とする婚姻ブームを背景とした、いざなぎ契機は、57カ月長期拡張した。

年 代	昭和25年(1950)～昭和44年(1969)
	0～19歳／青少年期(出生から中高、就職、大学生時代)
ライフ ステージ & ライフ スタイル	<ul style="list-style-type: none"> ・1949年生まれの「合計特殊出生率」は、4.32人、兄弟姉妹数は4～5人 ・団塊世代が小学生となった1956年経済白書「もはや戦後ではない」と発表 ・「団塊の世代」が就職したこの高度成長期は、年功賃金、長期雇用を柱とした日本的雇用慣行が普及・定着した時期 ・学歴賃金格差は70年代が最も大きい(学歴社会化)
団塊世代が 牽引した 商品・市場	<ul style="list-style-type: none"> ・団塊世代が小学校高学年の1959年には、週刊漫画雑誌が相次いで創刊 ・「団塊の世代」が「ハイティーンになると、ハイティーン市場が膨張 ・テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫といった当時「三種の神器」といわれた耐久消費財が家庭へ急速に普及 ・「団塊の世代」が小学校の高学年から中学生となっていた61年には、テレビの普及率は6割を超え、その後、63年にはテレビアニメが、さらに65年にはテレビ空想特撮の放送

②団塊世代の“若い夫婦時代”

団塊世代の若い夫婦時代～20歳代の生活事情～

マイホームを夢見、マイカー、カラーテレビ、エアコンを楽しむ新・核家族

昭和46年、団塊世代を中核とする婚姻件数はピークに達した。この時期、団塊世代の大量の就職、結婚による家計の独立、世帯数の増加は貸家需要を増大させるとともに白もの（冷蔵庫、洗濯機、掃除機）、エアコンやTV・オーディオ、家具、家事用品など家庭用耐久財の短期集中的な購入を増大させる。これに影響されて住宅着工の増加、家庭用耐久財生産の増加が続く。しかし、昭和48年（1973）以降、婚姻適齢人口、若者人口は急減、世帯増加率低下、これにより内需（耐久財+投資・建設財）は激減した。昭和47年同年6月「日本列島改造論」。翌7月第一次田中角栄内閣発足。過剰流動を背景に住宅地より地価狂乱し、昭和49年（1974）、戦後初のマイナス成長。物価高騰下の不況、スタグフレーションが発生。内需減少により貿易黒字増大で対米貿易摩擦が起きた。

社会は、「ジャパン アズ ナンバー・ワン」から「不確実性の時代」へ、そして「エントロピーの法則」「宇宙船地球号（成長の限界）」へ移り変わっていった。

コラム 恋愛ごっこ、恋人探し、憧れの恋愛結婚

団塊ニューファミリーは、恋愛結婚からはじまった

団塊の世代が25歳前後になった1975年の厚生省（現・厚生労働省）の人口動態統計などによると、初婚年齢は男性が27歳、女性が24.7歳。結婚の形態は、「見合い結婚など」が34.9%、「恋愛結婚」が65.1%と恋愛が大きく上回っている。

恋愛結婚と見合い結婚の割合が逆転したのは70年だが、その後の5年間で10ポイントも増加し、団塊の世代が恋愛結婚の新しい流れを作ったといえる。

▼見合い結婚と恋愛結婚の移り変わり（1955～1987）

厚生省出産力調査

	1955～ 59年	1960～ 64年	1965～ 69年	1970～ 74年	1975～ 79年	1980～ 87年
見合い	51.5	46.6	42.5	32.6	30.4	26.5
恋愛（職場）	13.8	20.3	25.6	29.0	26.6	23.5
恋愛（友人の紹介）	9.7	11.7	12.9	14.7	19.7	22.4
恋愛（偶然の出会い）	5.0	4.7	4.8	6.8	7.1	8.6
恋愛（サークル・クラブ）	2.5	3.9	3.1	3.8	5.7	5.9
恋愛（学校）	1.9	1.6	2.8	4.6	4.9	7.7
恋愛（隣人関係）	10.9	7.7	5.2	5.2	2.9	2.9
恋愛（その他）	4.7	3.5	3.1	3.3	2.7	2.5

1965～69年＝団塊世代が22～26歳

③ 団塊世代の“子育て・教育期”

団塊世代の子育て・中年期の夫婦～30 歳代の生活事情～

バブル経済に浮かれたニッポンの新家族

30 代後半から 40 歳代前半になった団塊世代のマイ・ホーム購入意欲は旺盛で、住宅着工を加速し、耐久財の買い替え需要の短期集中的実現を生み出した。それは、一方で、不動産を中心とする資産価格のみが高騰したが、生活は比較的安定しており、マイホームの充実と家族のレジャーと家族のショッピングに団塊世代家族はひた走る。

憧れの専業主婦となった団塊世代女性は、子供の教育に注力する一方、団塊世代の男性は企業戦士として会社と仕事に明け暮れることになる。その結果、団塊夫婦の関係は相互尊重しあうものの、時間的空間的な隔たりも出てくるようになる。不倫や子供の暴力問題が多く発生するようになった。

昭和 62 年（87）円高不況対策と 8 兆円大型緊急経済対策が功を奏し、財テク・ブーム、節税ブーム、投機ブームを生む。消費は、住宅価格が年収の 6 倍となりマイホーム諦め組みは高級外車等への耐久財購入など大型高級消費に走る。その頃から、晩婚少子が加速し平成元年（89）は特殊出生率 1.57 ショックで 66 年の丙午（1.58）を上回った。

ジャーナリズムは、頻繁に恐慌到来を予言。小さな政府、規制緩和論、民営化、公共部門の企業化・競争原理の強化を言い出すが、日本の家庭の崩壊が様々な形で出始める。

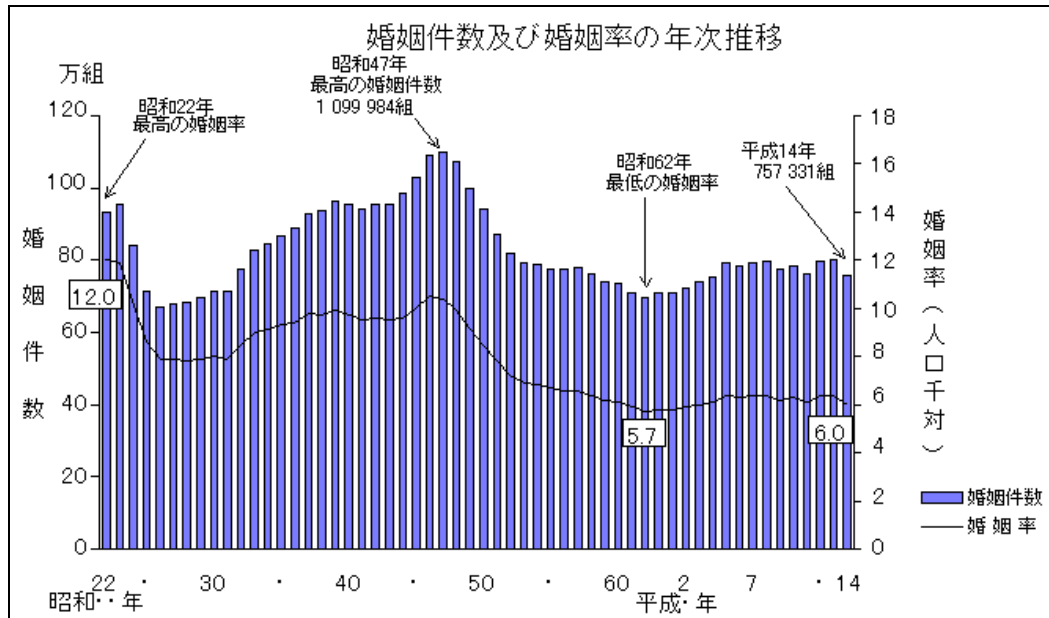
年 代	昭和 55 年（1980）～平成元年（1989）
	30 歳～39 歳／育児期前期（出産、育児）
ライフ ステージ & ライフ スタイル	<ul style="list-style-type: none"> ・団塊の世代が家庭を持ち、郊外団地に核家族を単位とする「ニューファミリー」が形成 ・住宅着工戸数は、70 年代後半、80 年代後半にも急増 ・「団塊の世代」の女性は 20 代後半時の女性が専業主婦になった割合が各世代の中で最も高かった（「金妻」など） ・男性の方は職場での激しい出世競争のなかで「会社人間」となる人が多かった。
団塊ファミ リが牽引 した商品・ 市場	<ul style="list-style-type: none"> ・「団塊の世代」が 30 代半ばとなった 82 年には乗用車の普及率が 6 割を超えた ・乗用車の普及を背景として 65～82 年の 17 年間で乗用車関連の余暇市場は 1,152 億円から 2 兆 148 億円へと 17 倍に拡大（余暇開発センターの推計） ・マイカーでのレジャー体験、ショッピングセンターの利用などは、家族のふれあいなど、家庭生活にも大きな影響 ・レンタルやローンの普及も普及し、主婦層を中心としたカルチャーセンターが増加 ・インスタント食品、外食産業への需要増加なども、「団塊の世代」を中心に広がる

コラム 日本の結婚事情を大きく変えた団塊世代（団塊世代と結婚）

団塊世代の結婚の特徴

- ・史上初の結婚ブーム(昭和47年110万組)
- ・同世代人口が多く、競争が激しく結婚もライバル競争になった団塊世代の結婚.
- ・結婚適齢期を引き上げた団塊世代（女性結婚適齢年齢は24～25歳、男性は27～29歳）
- ・恋愛結婚が見合い結婚を上回った団塊世代の結婚
- ・同年齢結婚、年下との結婚が増えはじめた団塊世代の結婚
- ・借家ブームを生み出した団塊世代夫婦
- ・マイカー、家電ブームを引張る団塊世代夫婦

▼第二次結婚ブーム（昭和45～昭和50年）は団塊世代の産物



▼団塊世代からはじまった「同世代感覚重視・男女平等重視」傾向

・初婚夫妻の年齢差別にみた構成割合（％）の年次推移

年齢差	昭和45年	50年	55年	60年	平成2年	7年	12年	13年
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
妻年上	10.3	12.5	11.7	12.1	14.3	17.7	21.9	22.5
夫妻同年齢	10.1	12.6	12.8	14.3	15.9	17.6	19.2	19.0
夫年上	79.5	74.9	75.4	73.7	69.8	64.6	58.9	58.5

注：各年に同居し届け出たものについての集計である。

—結婚年表・ニッポンの家族①

▼70年代・結婚年表		ウーマンリブ／アンノン／自由恋愛／結婚ブーム
S 45	アンノン族	ウーマンリブ大会、コンピュータで結婚相手を決める仲人連盟が創業
S 46		フィーリング時代
S 47		「中絶禁止法に反対しピル解禁を要求」（中ピ連結成）、情報誌『ピア』創刊
S 48		同棲ブーム（劇画上村一夫『同棲時代』・かぐや姫「神田川」ヒット）
S 49		お見合い番組『パンチDEデート』、ハネムーンに南九州ブーム（挙式者の3分の1） 戦後最高の「結婚ラッシュ」で120万カップル誕生 「3トモ時代」一男女共学・友達・結婚・共働き、昭和24生まれ24歳に
S 51		結婚難
S 52		通称かけこみ寺開設、キャンディーズ引退「普通の女の子に戻りたい」
S 54		「ニコニコ離婚講座」開設、未婚の母が過去5年で倍増（厚生省）
▼80年代・結婚年表		超豪華ウェディング／ダイアナ王妃／お嬢様／新人類／家庭内離婚
S 55	山口百恵・三浦友和（赤坂・霊南坂教会、挙式2億円、テレビ視聴率30.7%） 田中康夫『なんとなくクリスタル』刊	「クリスタル族」の言葉を生む
S 56	イギリスチャールズ皇太子・ダイアナ	ダイアナ妃ブーム
S 58	連続ドラマ『金曜日の妻たちへ』（TBS系列）から	「金妻」（不倫願望のある妻）が流行語に。東京ディズニーランドオープン（4月）
S 59	伊集院静・夏目雅子	
S 60	松田聖子・神田正輝（目黒・サレジオ教会、挙式2億円、テレビ視聴率34.9%） 科学万博つくば85開幕。	新人類
S 61	お嬢様ブーム	「家庭内離婚」（林郁の著書から流行語に） 『anan』イイ男、寝たい男特集恒例化で女が男を選ぶ時代に
S 62	フジテレビ『ねるとん紅鯨団』放送開始 郷ひろみ・二谷友里恵（赤坂・霊南坂教会、挙式3億5000万円、テレビ視聴率47.6%）	
S 63	DINKS (double income no kids)	アッシー、メッシー、ミツグ君の言葉生まれる 『Hanako』創刊

④ 団塊世代の“中高年”ニューファミリー時代

団塊世代の中高年期の生活事情

バブル崩壊、資産の目減り、ローン返済、消費抑制、幻想の豊かな家族

40歳代になった団塊世代の家庭は、住宅ローン、教育ローン、老後の蓄えの為、義務的貯蓄が増大し、多額の生活費が必要となり家計の資金繰りは逼迫し、消費抑制はピークに達する。

バブル経済が崩壊し、企業財務の悪化し、企業の不況感（財務逼迫、過剰設備）が社会を覆った。そして、少子化だけでなく若者の仕事が少なく失業者も増え、独立世代人口は減少傾向へ反転している。その結果、リストラ解雇→就業者減→人件費減デフレ・スパイラル＝価格破壊の連鎖で日本は長期不況となった。しかし、ゆとりのある層を中心に、消費、住宅着工は意外にも堅調で、平成5年（93）にはマンション・ブームが起っている。

その中で、「社会、経済の規制は原則廃棄。市場競争を激化させ、ニュービジネスが勃興することで大量の雇用が創造される。」と「平岩レポート」が出るが、国際化の波に巻きこまれ金融破たんが起っている。企業のリストラが本格的に始まり、平成5年の連合調査では、「もはやサラリーマンの会社への忠誠心は無くなった」とまでいわれた。資産の減少、所得の伸び悩みなどから消費抑制が始まる。百貨店やスーパーなどの売上げが前年をしまわり続けた。

年 代	平成2年（1990）～平成11年（1999）
	40歳～49歳／育児期後期（子供の教育）
ライフ ステージ& ライフ スタイル	<ul style="list-style-type: none"> ・「75～76年生まれ」の兄弟姉妹数は2.39人（長男、長女の一人子の時代） ・家族の役割として「互いに助け合い、支え合うこと」を重視 ・親の7割程度は子供を育てることを「楽しみ、喜び」と感じている（マイホームパパ） ・一方、「会社人間」も多く、例えば、単身赴任の中年世代でその数も増加 ・子供のしつけや子供の勉強をみることについて父親の役割は低くなった
団塊ファミリーが牽引した商品・市場	<ul style="list-style-type: none"> ・バブル経済の影響で、高額大型消費を楽しんだ団塊世代であったが、90年以降のバブル崩壊で消費を抑制 ・子供の教育費、交通費、通信費などに消費のウエイトがかかるようになった ・大型店に変わって、コンビニエンスストア、ディスカウントストア、通信販売など比較的新しい販売形態が出現 ・しかし、団塊世代は、新しい販売形態に馴染まず、スーパーやデパートを利用 ・親と子供の消費スタイルに「世代格差」が生じてきた。

—結婚年表. 日本の家族②

▼90年代結婚年表 揺れる結婚、男女関係	
H2	成田離婚増える 谷村志保『結婚しないかもしれない症候群』刊 天皇家の二男礼宮文仁親王・川嶋紀子さん
H3	イギリスダイアナ皇太子妃、別居 純愛ソングブーム (KAN『愛は勝つ』小田和正『ラブストーリーは突然に』沢田知可子『会いたい』等ヒット)
H4	冬彦さん (TVドラマ『ずっとあなたが好きだった』の佐野史郎が演じた役) マザコンの代名詞に 女子大生就職氷河期
H5	「雅子さん現象」外交官小和田雅子さん、皇太子・小和田雅子さん結婚式 職業を持つ女性が人口の5割を超える 恋愛支援雑誌『XY』(ゼクシィ) 創刊
H6	『マディソン郡の橋』ブーム。 理想の夫婦 (MORE・五十嵐淳子&中村雅俊・山口百恵&三浦友和)
▼結婚年表/ジミ婚時代・	
H7	イギリス皇太子・ダイアナ妃、離婚
H8	山口智子・唐沢寿明、ハデ婚からジミ婚へ (入籍、あるいは身内の式だけ)
H9	「リストラ離婚」の言葉生まれる、渡辺淳一『失樂園』刊 不倫ブーム 安室奈美恵、SAM入籍、20代に「結婚したい」「子どもがほしい」現象。
H10	「友達みたいな夫婦が理想」、女性の仕事、趣味や交友関係を理解してほしい 30代「結婚しても今の生活レベルを落としたい」男性78.3%、女性88.3% (ダ・カーポ)、公務員が一番人気。 パートナー型の結婚 独身女性の求める結婚相手は3C (厚生白書)「Comfortable (十分な収入)、Communicative(理解しあえる)、Corporative(家事に協力的)

⑤還暦を迎えるニューファミリー家族の主人公・団塊世代

高齢者予備軍の団塊世代夫婦

就業、年金、健康、老後生活の4大不安が待っている

団塊世代の年齢が50歳台に達したが、日本で初めてのデフレ不況に見舞われる。デフレ不況は、企業の売り上げを減らし業績を圧迫し、コスト減を余儀なくした。その結果、ボーナスや家賃が抑えられ、サラリーマンの所得は横ばいもしくは減少している。今までの企業社会では、50歳代は所得も消費も最高のレベルで推移したが、団塊世代は所得減、消費抑制を強いられている。一方、企業は不良債権の処理や総人件費削減する中で、企業業績は立て直りを見せ、米国や中国の好景気に乗じて自動車などの輸出企業が売り上げ増、設備投資増へと転換している。さらに国内消費需要については、DVD、薄型テレビ、デジタルカメラの新製品が市場に登場し、また、携帯電話・ノートパソコンなどの普及が高まるなど情報化社会への歩みが見え始めた。しかし、少子高齢化が進展し、将来の年金や介護問題への不安が高じ、老後の生活の備えをさらに強化する必要があるが出てきている。子供たちの独立と、夫婦二人のみの生活という新ライフステージに戸惑う団塊世代が多く見られるようになった。

年 代	平成 12 年 (2000) ～平成 21 年 (2009)
	50 歳～59 歳／夫婦単位の向老期 (子供の結婚、夫婦二人)
ライフ ステージ & ライフ スタイル	<ul style="list-style-type: none"> ・子供の結婚などで親子の同居や異居問題が発生、夫婦二人生活世帯が増え始めた ・老親の介護の長期化問題も発生 ・「熟年離婚」や「定年離婚」という中高年層の離婚件数は増加 ・同様に、離婚後に再婚する確率は 80 年には離婚経験者の約 40%、95 年には離婚経験者の約 48% ・成人男女の親との同居問題が発生 (子供の未婚、晩婚化、パラサイト)
団 塊 ファ ミ リ ー が 牽 引 し た 商 品 ・ 市 場	<ul style="list-style-type: none"> ・団塊世代の子供たちといわれる「団塊ジュニア世代」(1971～74 年生まれ)が登場 ・携帯電話、パソコンなど情報通信機器は、不況期にもかかわらず、数年の間にめざましく普及 ・団塊の世代が、若者の消費に引きずられる形相を見せている ・土地や株など資産の減少、所得不安、年金問題、預貯金金利の低下、金融機関の不安など、団塊世代は消費生活意欲が減退

コラム 「離婚、再婚」をタブー視しない中年になった団塊世代夫婦

結婚年代別では、昭和 55 年（1980 年）後半から同居期間の長い夫婦で離婚が増え続け、その後すべての夫婦で増加している。一方、再婚も昭和 45 年（1970 年）以降から増加傾向にあり、1980 年代後半からは全結婚件数の約 2 割が再婚となっている。

・年次別の離婚率（人口千人あたりの離婚件数）でみると、人口の年齢構造、初婚発生数などの影響を含んでいるため注意が必要だが、50 歳時の離婚経験者の割合は、1950 年代後半のコアホート（同年出生の人口集団）で 20%に達すると考えられる。（つまり夫婦の 5 組に 1 組が離婚をする割合）。ただ、この離婚の程度は、ヨーロッパ諸国の 30-40%、アメリカ、スウェーデンの 50%などに比べると依然として低い

▼離婚は中高年齢層が急増中

離婚データ 同居期間別にみた階級別離婚件数・構成割合（平成 13 年）

夫の年齢	総 数	5 年未満	5～10	10～15	15～20	20～	不 詳
総 数	214 142	77 221	49 381	27 421	18 416	30 019	11 684
～19 歳	709	662	・	・	・	・	47
20～24	13 648	12 434	531	・	・	・	683
25～29	38 244	26 123	10 164	290	・	・	1 667
30～34	45 363	19 178	18 554	5 439	173	・	2 019
35～39	33 973	7 983		10 073	3 340	88	1 676
40～44	24 744	3 861	4 271	6 058	7 023	2 142	1 389
45～49	20 219	2 501	2 207	2 681	4 557	7 022	1 251
50～54	18 969	2 211	1 584	1 648	2 186	9 999	1 341
55～59	9 294	1 121	688	683	645	5 426	731
60～64	5 086	643	331	334	292	3 030	456
65～69	2 362	304	149	133	118	1 417	241
70～74	965	126	54	50	43	577	115

* 夫妻の年齢は別居したときの年齢

▼再婚は増えるばかり

再婚データ 初婚-再婚別・夫妻の組み合わせ別にみた婚姻件数の年次推移（組み合わせ）

初婚・再婚	昭和 45 年	50 年	55 年	60 年	平成 2 年	7 年	12 年	13 年
夫妻とも初婚	914 870	822 382	657 373	613 387	589 886	646 536	630 235	623 514
夫初婚妻再婚	28 913	33 443	33 512	32 854	35 567	40 631	47 939	51 256
夫再婚妻初婚	52 846	49 063	44 042	43 222	47 586	53 622	61 272	64 169
夫妻とも再婚	32 776	36 740	39 775	46 387	49 099	51 099	58 692	61 060
再婚計	114 535	119 246	117 329	122 463	132 252	145 352	167 903	176 485

第V部・まとめ

浮遊する日本の家族「新・ジャパニーズ家族」

■人間関係の不安・不信の危うさが見え隠れする現代日本の家族

一定の年齢になれば結婚し、子供は2,3人。そんな「常識」は崩れつつある。

2007年には日本の総人口が減り始め、そして2007年には団塊世代の走りである昭和22生まれの約250万人が60歳になる。以降3年続けて同程度の人口が60歳になり日本の年齢人口構成は、少子高齢の逆ピラミッドになる。

少子高齢社会は、高齢者も含めた単身世帯が夫婦と子供で構成する「標準世帯」を上回って最大勢力になる。変容は静かだが、確かで大きなうねりとなって標準世帯をモデルとする社会システムは完全に崩壊してゆく。

加えて、明治以降に培われた「老親を慈しみ、次世代を育てて価値を継承する」といった日本の近代的家族は、戦後の昭和から平成時代の間の50年間で脱近代化が進んだ。

そして、脱近代化が進行する中、パラサイト族やフリーターやニート族といった新社会族が続々と生まれ、一方では、母子世帯100万世帯、生活保護世帯100万世帯というような非標準世帯のボリュームは、標準世帯を大幅に上回る社会になった。

脱近代化の中で家族のさまざまな機能が変わり、家族の維持に関して微妙な不安と不信といった漠然とした何か危うさが見え隠れしている。

親子や夫婦のあり方に「正解」はないが、いま日本の家族は目標が見えてこない構造改革がはじまっている。

■目標がないため身近な存在に「安らぎ・信頼」を求める現代ニッポンの家族

・ペットの犬・猫の数が子供の数を上回った！

2003年のペットの犬猫の数は、過去最高の1922万頭（ペット協会発表）に達し、15歳未満の子どもの数1790万人を初めて上回った。ペットを「うちのこ」と呼ぶことについて、「特に違和感はない」と答えた人は60.5%といまや多数派。父親の権威を落としてしまった50歳代の男性が家庭での行動として「犬の散歩」が上位に上がっていることなど親子の関係はペットとの関係以下に成り下がっている。「ペット受け入れ神社」では、初詣のペット用のお守りの売れ行きが、人間用とほぼ同数になったという。

「昔の家族は、豊かになるという目標に向かって一致団結した。豊かな今は目標がない。だから安らぎや信頼といった心の満足を身近な存在に求める」（東京学芸大学

の山田昌弘教授) という指摘もある。家族にかけがえのない存在を求めても難しくなってしまうわけで、家族みんながペットへの思いを深めているが、それは、家族の重要な機能である情緒安定機能の喪失ともいえる。

子育てなどの親子関係や夫婦の関係は、適度に手間がかかり、飼い主を裏切らないペットとの関係にシフトしてゆく。

・ 誰もよくわからない社会に。時代の見通しが立たない!

東京学芸大学教授山田昌弘氏によると、「戦後社会の第2の転機は90年代後半にやってきた。自殺者が突如急増。90年代は2万2000人前後で推移していたのが、この年3万3000人となり、そのまま高止まった。フリーターの数も98年の323万人から99年は385万人へと増えた。家族分野でも「できちゃった婚」、離婚、児童虐待の増加傾向に弾みがついている」という。

これらの数字が示す社会変化の背景には、単純にその当事者たちの時代の経済環境や社会状況の変化だけではないものがある。それは、家族の問題である。特に経済高成長期に形成された団塊世代の核家族の疲労は激しくいものがあり、家族の諸機能が機能しなくなったのである。

日本の核家族は高成長からバブルまでの10年間とバブル崩壊以降の平成不況という日本の歴史上ありえなかった出来事を二度も経験している。その二度の経験の中で日本の家族は天国も地獄も見ることになった。

社会がゆったりと滑らかに成長することであれば家族疲労は軽くクリアされるはずだが、世の中は上下左右に激しく動いた。バブル崩壊、オーム真理教事件、阪神・淡路大震災、金融破たんなどなどの事件が、子供の成長期、大人の成熟期の現代の家族に大きな衝撃を個々に与え、どのように危機から守るのか、難しい選択が課せられた。その上、「自己責任」を子供から大人まで社会は求めた。家庭の危機回避の準備期間も与えられず想定外の出来事が起こっている。

・ 誰が、何が、家族を支えるのか

さらに加え、近代日本で初めての人口減社会・少子高齢社会日本の家族に立ちどころだかる。親も子も、妻も夫も、誰もがどのように関係がもてるのか、子も親の方も分からなくなっている。今までの日本の家族の関係というのは、結局は生活維持の上に成り立っていたのだから、日本の家族を支えていた男性の終身雇用や年功賃金を維持できなくなれば、これまでの家族の関係は崩れてしまう。

少なくとも今後は、妻にせよ子にせよ夫や親の収入に頼るのではなく、経済的な自立が求められる。

欧米では家族の構成員が経済的に自立したうえで、家族の間に信頼関係が生まれている。経済的な安定が与えられることを見返りとして、家族の信頼を築くような

関係とは違った家族関係のあり方が、日本の家族にも求められる。

■日本の新家族・ジャパニーズファミリー■

団塊世代が日本に「新しい家族・ニューファミリー」を誕生させてから30年を経過した。その経過の中、高齢化・少子化が急速に進行し、日本の社会には、パラサイト族、未婚・離婚の単身世帯、老人単身世帯、夫婦のみ世帯、DINKSといった多様な種類の家族が力(生産、労働、情報、消費分野)を持ち始めた一方で、社会的責任も世帯主中心の家族責任から「個人の自己責任」を問う社会に変わってきた。

大正から昭和の時代に、日本の家族は脱近代化というテーマを持ちつつ、経済成長社会もしくは右肩上がり上昇志向型スタイル社会に適応する家族＝核家族を大量に作り上げてきたが、その中で、家族の存在意義や機能は大きく変わった。

その後、平成社会に入り、脱近代化した家族も金属疲労を起こし、家族の構造改革が求められはじめた。子供が極端に少なく、老人が極端に多くなる今後の日本社会は、世界に類の無い社会となるわけだが、その基礎単位である家族はどうなるのか、その結論はない。日本の家族の構造改革が強られるが、現在進行中の家族の姿あるいは、そのソフトランディング先の着地の姿をトレンドとして確認しておく。

トレンド1 「生涯3世代同居」型慣行から、「途中同居」型慣行へ、そして欧米型へ

高齢者の子世代との同居率の変化は、家族の変化を象徴するデータであるが、「85才以上の高齢者と子供世代の同居率」を見ると、1975年＝80.8%、1990年＝70.6%、2000年＝63.0%（推計値）、2010年＝54.6%（予測）に低下することが予測されている。85才以上の高齢者層でさえこうなのだから、これより若年の高齢者層の同居率はもっと低下する。こうした事実は、戦後日本の老親と成人子の世代間関係のあり方が

→当初からの「生涯3世代同居型」から

→親が高齢になったときもしくは親が倒れて後の「途中同居」型へ

→そして、高齢者が子代と同居することが少ない欧米型へ

と移行していくことになる可能性が大きい。

トレンド2 将来的には、老親とシングルの中高年子という同居世帯が増える

子世代と同居する比率が欧米ほど低下しなかったとしても、現在「パラサイト・シングル」世代と呼ばれる親と同居する20・30歳代のシングルの子どもたちが老親の世話をする近未来には、老親と既存の息子家族という組み合わせから老親とシングルの中高年子という同居世帯が増えていく。

トレンド3 分業型家族モデルから共働き前提の家族モデルへ

夫は仕事、妻は家事子育てといった、戦後の分業型家族モデルは、夫婦共働きを前提とした家族モデルへ移行する。「男女別就業意識の違いの推移」という調査では、1972年には男性の26.2%が「(女性は)結婚するまでは職業をもつ方がよい」と回答していたのが、1995年には11.1%まで15ポイント減少し、代わって「子どもができてもずっと職業を続ける方がよい」というのが同時点の9.7%から27.3%へと大幅に増加している。意識がかなり変わった。

トレンド4 強まる家族の離散と集合。大家族の可能性は十分見込める

戦後の家族の変遷を追うと、1950年代の大家族と自営業者が多く、近隣共同体とのつながりが強かった時代、1960年代の団地が増え、雇用労働者と専業主婦による核家族化が進んだ時代、70年代から90年代にかけての個室とリビングルームからなる住宅、少子化、晩婚化の時代、今日に至る携帯電話、家族関係が拡散する時代へと変化してきた。

90年代に入ると、「一家に一台」だったテレビ、ラジオ、電話などが、今では「一人一台」の時代となり、電話は体に身に付けて持ち歩くものになった。今後、一人化が進んで家族は解体するのか、携帯電話の結びつきなどによって新たな大家族が生まれるのか、大きな問題だが、メディアは、家族の構造改革の目玉になる。メディアの個人化が進む一方で、それ契機に、もう一度ノスタルジックな大家族が出現する可能性もある。(反バーチャル・リアリティ家族)

トレンド5 親と同居するのかもしれないのに迷うが、近居で解決

長男長女、一人っ子時代といわれている。次男の数はあまり多くなく、三男以降に至っては全く希少な存在になっている。となると、結婚相手として長男が敬遠される傾向は強まる。

敬遠する理由は、長男と結婚すれば夫の親と同居する可能性があるからであるが、その核心には、「嫁と姑」の問題があるが、この問題の解決策として、最近では、近居を志向する親と子が増えている。

高度経済成長期以降、社会構造が激変して世代ごとの価値観も全く異なるようになってくるなかでは、相互自立する家庭ではあるが相互の生活もサポートするといった「近居」という生活スタイルで適応することができる。特に大都市の都心に近い郊外では注目されるだろう。

トレンド6 これからの家族の変化は、メディアや産業の進展・推移に影響される

メディアはマスメディア、パーソナルメディア、ネットワークメディアと変化し、また、産業社会も変化してきた。そして家族の変化は、これらのメディアや産業の変化が促してきた。

例えば、個人にとって、携帯電話が普及したことによって、いつでもどこでも、誰とでもネットワークを広げられるようになった。コンビニエンスストアの拡大や携帯電話（家族との連絡や泊り場所探しが簡単）の普及はますます増える。そのことによってか家族の行動の自由度や情報の自由な受発信が盛んになる。

個人の自由度が増すだけでなく家族間の行動の自由度も高まる。個人の感情や意見が自由に表現できなかつその表現をストレートに受け止められるだけの情報装備が家族全員あれば、少なくとも、家族相互の不信から起こる家族の離散・分散は避けられる。

情報メディアや家族のサポートサービスの生活水準によって家族は大きく変わる可能性がある。

■終わりに■

アメリカで「ステップファミリー（継家族）」が増えているようだが、離婚後再婚するファミリー同士のことだ。親と子の関係や子供同士、離婚相手などの関係が、半兄弟・半姉妹の血縁・非血縁関係の複雑な関係にあるが、今のファミリーも前のファミリーも、「特に子供たちだが、今生きている人、あるいは生活をしている人たち」を大切にするという方法を、新たな親族ネットワーク（新たな家庭関係として捕らえようとする）をつくることで継承していこうとするものである。

命を授けられた子供たちの感性や能力を、当事者だけの問題で離婚した後も、その感性や個性を育くむ義務と責任を離婚の両当事者が継承する新しい家庭ネットワークである。

こんなことが可能なのは、様々なメディアの普及と生活サポートサービスの発展進化があるからこそである。

家族の形や機能だけにこだわった日本の家族の近代化と脱近代化そのことに引きずられてきたが、家族の構造改革が迫られる中、もう一度、子供の命、人の尊厳などについての精神的あるいは宗教的な意味における家族へのアプローチが必要であろう。魂のない家族の構造改革に真の改革はない。